

山浦清麿

吉川英治

青空文庫

小諸の兄弟

一

『のぶ。——刀かた箆なだん筒すを見てくれい』

はかまひも

袴はかまの紐を締め終つて、懷紙、印籠などを身に着けながら、柘植つげ

嘉兵衛かへえは、次の間へ立つ妻の背うしろへ云つた。

『——下の抽斗ひきだしじゃ。この正月、山浦やまうら真雄さねおが鍛うち上げて来た

一腰があるじやろう。二尺六寸ほどな物で、新しい木綿もめんに巻き、

まだ白鞆しらさやの儘で』

『ございました。この刀ではございませんか』

『それそれ』

と、嘉兵衛は手に持つと、座敷の中ほどに、悠ゆつたり坐り直した。

今朝――

この信州松まつしろ代の城下、長国寺の境内で、藩のお抱え鍛冶かじ、莊しようじなおたねおたね司直胤しちきが主催で、大がかりな刀の「試し」がある。

それはもう、明あけ方がたから始まっている筈とあつて、気短きみじかな嘉

兵衛は、

(はやくせい。はやくはやく)

と、食事も急^せぎ立てるので、彼の妻は、良人^{おつと}を送り出すのに、うろうろして急いだ程だった。

で、もう玄関には、草履^{ぞうり}を揃^{そろ}えて、供の仲間^{ちゆうげん}も先刻^{さつき}から待っているというのに、嘉兵衛は、白鞘の一腰を払うと、

『のぶ、打粉^{うちこ}を出せ』

と落着き直して、悠々と又、刀の拭^{ぬぐ}いをし始めた。

ゆうべも、独りで取出して夜更^{よふ}けまで、眺^{なが}め入っていた刀である。

よほど、気に入っているらしかった。

『うむ。……いいところがある。直胤^{うちもの}の鍛刀などよりは、無名のこの作者のほうが、遙^{はる}かに、魂がはいっておる』

つぶや
呟いて、木綿袋へ巻き直し、

『では、行つて来るぞ』

と、膝ひざを起てかけた時である。

折も折、客とみえて、玄関に控えていた仲間が、そこから告げた。

『御新造ごしんぞさま。山浦の御舎弟がお見えでござりますが』

声を聞いて、嘉兵衛が直じかに、奥で云つた。

『なに、真雄さねおの弟が見えた。……むむ、大石村へ養子に行つた

とか聞いていたが、あの環たまきと申す次男であろう。いい所へ来た。

ちよつと上げろ』

二

山浦環は、又の名を内蔵助くららのすけとも称いった。まだ二十歳はたちぐらいで、固く畏かしこまって坐った。黒い眸ひとみには、どこかに稚氣ちきと羞恥はにかみを持つていた。

藩士ではない。小諸こもろに近い山里の郷土の子である。だから城下へ出て来る時など、殊に身を質素にしていた。粗末な木綿の着物に木綿の袴はかま——どここと云って派手はで気のない田舎いなかびた青年ととのだった。けれど、それで居て、肩の薄い肉づきだの、整った目鼻だちだの、天性の端麗たんれいが、どこやらに潜んでいた。

『……そうか、御年貢おねんぐの事で、お蔵役所くらまで参ったのか。よく寄

つてくれた』

『序ついでと申しては、恐れ入りますが、以来、御無沙汰いたしております。常々兄の真雄さねおが又、一方ひとかたならぬ御庇護ごひごに預かっております由で』

『いや、そちの兄も、ぐんぐん腕が上つて来てな。後援うしろだてしておるわしも、世話せわ効いがあるというものよ。——時に、そちはもう、近頃では、刀も鍛うつまいな』

『はい、養家ようか先では、刀を鍛つなどという暇はおろか、刀を観みるまもございません。庄屋の雑務やら養蚕ようさんやらで』

『百姓もいい。そちのような者が、庄屋の跡目を継いで励めば、あの辺の村々もずんと好くなるに違いない』

環は、ふと、淋しげな顔をして、
たまき

『近頃も、兄は相変らず、お宅様へは伺っておりますか』

『ム。稀まれに見えるが、今年はまだ、正月に鍛ち上げた此の刀を持つて見えたきりじや』

『お。それは、兄の鍛えきたでございますか』

『見るがよい、懐なつかしからう』

『はい』——と、手を差し伸べかけたが、

『いや、止しましょう。刀を見ると、又、鍛冶小屋が恋しくなつて、兄のように、自分も鋤つちを持ちたくなります』

『そちも、刀鍛冶が、好きとみえるな』

『兄は、上田の御城下に住む、河村寿隆かわむらかずたかの門に習まなび——私は

その兄から、十三四歳の頃より、鎚つちの打ち方、重ね鉄かねの仕方、土取り、火入れまで教わりました』

『では今迄には、兄弟して、鍛った刀も多かろうな』

『いつも、兄が本鎚ほんづちに坐り、私が、対むこう鎚を把とつて、夜の白む

のも知らず、鍛ち明かしたもので御座いました。……けれど、他

家へ養子に参つてからは兄に会あうのも、年に一度か二度。鎚の音

さえ、此の頃はとんと、耳から忘れた気がいたしまする』

でさき

出前らしい容子に氣づいて、環は、急に長座を詫たずさび、携たずさえて来

みやげもの

まゆおり

た土産物の山繭織一反と、山芋つとの苞つととを、奥へ渡して、

『又、伺いまする』

と、辞しかけた。

あるじ
主の柘植嘉兵衛は、袋巻の白鞘しらさやを提ひげて、一緒に立ち上りながら、

『帰るのか。——ではその辺まで、同道しよう』
と、一緒に門の外へ出た。

三

家毎あんずの杏の花から、淡うすい朝霧が立ちのぼっている。

川中島の洲すを繞めぐる疎林や、丘の草にも、仄ほかな緑が萌もえ出して、
信濃の春は、雪解ゆきげを流す千曲川ちくまの早瀬のように、いっさんに訪れ

て来た。

兄の鍛った刀を持って、嘉兵衛が家を出て来たので、山浦環は、『きようは、どちらへお越しでござりますか』——と、其刀が気に懸かるように、訊ねた。

『知らぬのか』

と、嘉兵衛は、長国寺の境内に今朝ある「試刀」の催しを話して、

『誰が云い出したか、お抱え鍛冶の莊司箕兵衛直胤の鍛つ刀は、折れ易いというわさが専ら立ったものじゃ。で、直胤やその弟子共が、怪しからぬ中傷と怒って、自分たちの鍛つ刀が、噂の如く折れる物か、折れない物か、衆人の前で試してごらんに入れる。折れる折れるといわれる刀は、おおかた、近郷の名も無い雑鍛

治こしらものの拵え刀に違いない。左様ないかさま刀ものと混同されては心外である。禄ろくを頂戴しておる藩公に対しても、せんめい闡明にする義務がある。——などとひどく力んでな、大懸かりな試刀ためしをいたすというので、これから出向いてみるのじやよ』

と、説明した。

環は、聞くと、更に眼をみはつて、

『では、お持ちになった兄の刀も、そこで試すおつもりですか』
『うむ。直胤の弟子共は、天下に直胤ほどな名人はないように云い居るでな。——無名の、しかも、刀鍛冶とも名乗らぬ、素人の中にも、かくの如き、隠れた上手がある事を、見せてやろうと思うのじや』

『では先刻さつき、見よと仰つしやつた時、私も、見て置けばようござ
いましたな』

『なに、この、真雄の刀か』

『はい』

『そんな心配はいらぬ、見事なものだ。——いつぞやも、わしは
これを自慢に持つて、寺社奉行の山寺源太夫様のところへ行き、
お見せしたところ、殊のほか、お褒ほめに預かつた。そこで、ぜひ
源太夫様にも、一腰、真雄へお吩いいつ附け下さるようにとお願いして
おいたところ、快く御承諾で、其後、大小一揃い、真雄方へ、御
注文があつたという知らせで、わしも面めん目ぼくを施し、真雄に取つ
ても、愈 《いよいよ》、世に出る時が来たと、欣んでおるとこ

ろじやよ』

と、嘉兵衛はまるで、わが事のように、嬉しそうな顔なのだ。その顔つき通り、真雄の鍛った刀ものといえ、信仰的な自信を持って、斬れる、折れない、曲がらぬと、彼は、人にも広言して憚はばらなかつた。それほど熱心な後援者であつた。

四

——だが、嘉兵衛は、貧しい侍である。金や顔を以て、後援はできなかつた。

ただ努めて、真雄の人物と作刀を、重臣たちの間へ推賞したり

又、真雄自身へは倦まざる精進を、鞭撻べんたつして来ただけだった。

ところが。

松代藩では、それより数年前に、家老の矢沢監物けんもつの周旋で、初代水心子正秀すいしんしの直門じきもん、莊司箕兵衛直胤を、かなり高禄で、招しょう聘へいしていた。

人情は、当然、双方を、比較する。

(何どつ方ちがよいとも云えんなあ)

と、いう評が、密かにあつた。

(いや、むしろ真雄のほうが、出来はむらだが、良い刀ものがあるぞ)
そんな観方みかたをする者もあつた。

そこへ、近頃、

（直胤の刀が折れた。——どうも直胤の刀は、折れ易い）

と、いう噂がぱつと立った。

事実、川中島の辺で、若侍同志の喧嘩があつた時、一方の持つていた直胤の刀が、折れた事件もあつたのである。

又、家中の北きたざわなにがし沢某も又、

（自分も、試してみたが、やはり折れた——）

と、云つたとか、云わないとかで、揉もめ事があつたりして、直胤一門は、とにかく、噂に対して、激怒していた。

そこで、公開して見せるとなつた、今朝の長国寺の「試し」である。折れるか、折れないか、自分等の作さくとう刀を試す会だとは称いっているが、その目標が、無名鍛冶の山浦真雄にあることはいふ

迄もない。——途々^{みちみち}、嘉兵衛の口から、そんな事情を聞かされると、環は、

（これは、兄の名誉ばかりではないが）
と、遽^{にわか}に心配になった。

元々、兄は刀鍛冶ではないのだ。山家の一郷士に過ぎない。性来、刀を鍛^うつのが好きで、人に頼まれるまま鍛^うつて来たが、まだその道の専門家とは決^たしていえる腕ではない。

その兄の鍛^{たんとう}刀と——一世に名匠の聞えの高い水心子正秀の高弟直胤の刀と——何うして較べ物になろう。

（大丈夫）

と、嘉兵衛は思いこんでいるが、環^{たまき}は内心、案じずにいられない

かった。少年の頃、兄の対^{むか}う鎚^{つち}を打ったことのある環には、兄の腕が、たとえ其後、上達しているにせよ、どの程度か、分つていた。

『嘉兵衛様、その「試し」の場所へ、私もひとつ、お連れ下さるわけには、行かないでしょうか』

『なに、其方^{そち}も来る？　よかろうとも。家中に限るという規則はない。直胤一門の方では、むしろ一人でも大勢に見てもらいたがつている程だからな』

『では、他^{よそ}ながら、お供として』

『何を憚ることがある。山浦真雄の弟として、威張つて来い、大手を振つて従^ついて来い』

両作・川中島

一

長国寺の広い境内けいだいは人で埋っていた。

然し皆、武士ばかりだし——おごそ蔽かな刀試しなので、自然、見る者も立会い人も、せいしゆく静肅だった。

すえきり据斬、ため試し物目録

一 陣笠じんがさ、厚味三分七厘。お武具方御不用物。

- 一 四分一鍰、厚サ一分二リン透シ彫すかぼり
 - 一 俵たわらごも菰二枚たばね。五寸廻シ青竹入
 - 一 鹿の角三股つのみつまた
 - 一 鉄砂入り混粘張り陣笠こねば
 - 一 古革銅ふるかわどう、倉田猪之助所持。先祖大坂陣ノ節おり、着用ノ品。
 - 一 兜かぶと。柘植嘉兵衛所持。重量七百五拾匁めかた。八幡座鉄厚ミ
- 一分余。古作、鍛工宜シ。

こう、墨黒々と書いた貼紙の立て板が、どこからも眼につく幕の前に建てられてあつた。

——見ると今。

選ばれた斬り人きての一名が、業物わざものをふり被かぶつて、土壇の上の干ほし

藁^{わら}を斬^きっていた。

『この通り！』

藁十本ばかり残^{のこ}って、見事に斬れた。

斬り人は、使^{つか}った刀を翳^{かざ}して、

『直胤の作。刃こぼれ、曲がりなし』

と呶^{どな}鳴^なって、立会^{たちあ}い人の方へ渡^{わた}して、引き退^{ひき}が^がった。

陣笠、鹿角、古兜。

と次々に、べつな刀を持^もって出^でて、べつな斬り人が試^しみた。

皆、直胤の刀だ^った。

そして、かなりな斬れ味を見せ、二太刀^{ふたたち}、三太刀でも斬れな^か

った刀でも、折れはしな^かった。

直胤の悪評は、訂正された。

まだ、鉄杖てつじょうを斬るとか、鎧よろいの鉄銅かねどうを斬るとか、だいぶ項目が残っていたが、

『そう時刻があるまい。この辺で、ちと他の刀を試しては』

と、立会い人から、当日の主唱者であり、また今まで試された力の作者——箕兵衛直胤へ、相談があつた。

直胤は五十四、五歳の老人だつた。勿論、熱心に眼を光らせて、床几しょうぎに掛けて見ていた。

『いかがで御座ろう。——もうこれくらい試せば、もはや、あらぬ世評が、貴公を中傷する為の嘘うそであつたという事は、誰も承認したのであらうと存じますが』

立会い人が、そう云うと、直胤は、磊落らいらくそうに笑顔をくずして、

『いや、御苦勞でござった。わしは最初から、何も大して気には懸けておらんがの。……弟子共さえ、承知なら』

『では、近頃、頻しきりと名の聞える、山浦真雄の作りを、四、五本ここで試しますが、御異存はございますまいな』

『まあ、余り角目つのめ立たんがよいが』

『いや、持参して、望む者もございますから』

『望まれれば、試合を挑いどまれたも同じこと。嫌ともいわれまい。

——何事も、お世話人と、弟子共に、おまかせいたすで』

『然らば』

と、立会い人が、席へ退さがると、斬り人は又、名を呼ばれて立
 った。

二

『山浦真雄の作！』

一刀を払って、斬り人てが、こう刀を衆に示して、据物すえものに向う
 と、観衆も斬り人の呼息いきと一つになって、しいつとなつた。

『……………』

わけても、環は総身そうみを固くして、斬り人の手元を睨にらんでいた。
 呼吸いきもせず。——手にも、われとなく、汗をにぎって、

——ええいッ！

と云う声を、耳というよりは、彼は、心臓を突き貫ぬかれたように聞いた。

据物の鹿角から——どすつ——と鈍い音が刎はね返った。斬り人ては、二太刀目を下ろした。そして三太刀目。

『曲がつたッ』

と、さけんで、身を退いた。

たまき

環たまきの側にいた柘植嘉兵衛は、ぐらぐらとしたように、前へ出て行つた。

『あ。暫しばらく』

『なんじゃ』

『失礼ながら、今の試しは、斬り人の手元に、少し御無理があつたように見受けられた。——この一刀で、もう一応、お試しがやりたい』

『心得た』

と、嘉兵衛が携たずさえて来た一刀を受け取つて、斬り人は、前のようにそれを観衆の眼からずつと直胤一門の控えている方に迄、手元を徐々じょじょにまわして見せた。

『ムム。見た眼には、相すがたのいい刀だ』

直胤の弟子が、呟いた。

冷悔れいぶの色が、その辺りで漂つた。

だが、直胤は、その刀へ床几しょうぎから礼儀をして、

『大事に』

と、注意した。

白鞆なので、斬り人は、仮かり鰐つばを入れ、白布で柄巻して、揮ふり被かぶった。慎重な構えと、澄み切った氣息の合致したせつな、やツと満身から喚おめいて、壇の上の鰐を斬った。

鰐は七分まで斬れた。然し、びんと異様な音が、誰の耳にも触さわった。

斬り人は刃やいばを挙げて、

『鰐はばきから一尺上、刃こぼれ有り——。硬い』

云いながら、無造作むぞうさに、立会い役の手へ渡した。

嘉兵衛は、蒼白になってしまった。怪我けがをした我が児でも見ま

もるように、手から手へ、渡されて、冷侮の眼に弄もてあそばれてゆく愛刀の方を眺めた儘、茫然としていたが、突然側にいた環が、何かさけんで、ばつと人々の環かん視の中へ駈け出して行つたので、

『あッ。——才オ』

止めるとも、励ますとも、何どツ方ちつかずな声をあげて、自失の我から、愕おどろきの我に回かえつた。

三

『公平でないッ。今日の刀試しには、公然と、奸かん策さくが行われて
いると存じます！』

山浦環は、こう周囲へ向つて、訴えていた。

静かだった空気は、彼の凄まじい声も打消すほど、途端に、喧騒の坩堝に落ちていた。

今、斬り人の手から、立会い役の手へ渡された、兄真雄の作——柘植嘉兵衛が持参の一刀を——無下に環が奪ろうとしたからである。

『何をするっ』

『場所がらも弁えず』

『不正があるとは、何を吐ざるか』

蔽い被さつて、環を阻めた直胤の弟子や、斬り人の侍たちは、その襟がみや、両腕を把るなり、

『この青二才めが！』

引戻して、試し場の中ほどへ、蹴けた仆おした。

踏まれても、蹴られても、環はすぐ、刎はね起きた。そして、

『卑劣があると観たつ。不正があるつ。行やり直せつ』

と、叫んで歇やまなかった。

直胤の弟子たちは、

『抓つまみ出せつ』

と、息まいたが、その時、環の叫びへ、木魂こだまして答えるように、

観衆の中から、

『そうだ、不正が見えたぞ。行やり直せつ』

という声が、所々に起った。

それを又、打消すべく、

『だまれつ、喧^{やか}ましい』

『刀は、正直だ』

云い返す者があると、更に、それを圧^{あつ}伏^{ぶく}して、

『行^やり直しつ。行^やり直しつ！』

と、宣言するように、云つて歇^やまない見物もあつた。

俄然、平^{へい}常^{ぜい}、直胤の一派を支持している者と、ひそかに、そ

れへ反感を抱いている者との感情が、環の一投石に依つて、露骨な波瀾^{はらん}をよび起したのであつた。

そのうちに誰からともなく、

『あれは、山浦の舎弟だ』

と云う声が伝わったので、直胤一門は、

『何、真雄の弟だと？』

と、眼をみはり直して、愈、事態は険悪な対立の相を呈した。

四

今の環は灼熱した鋼であつた。

誰の言葉も、その赤い耳は刎ね返して、

『行り直さぬうちは』

と一歩も退かなかつた。

『云い条は、じょうそれか』

と、中へ這入った世話人たちが云った。

『それだけです！』

純情な眸めを光らして、環は猶、繰返した。

土気色おもてな面をして、先刻さつきから見ていた箕兵衛直胤は、

『お世話役、望みにまかせてやらっしやい』

と、床几から云った。そして、

『今の刀を、その若者に持たせ、同じ鍔を、斬らせてみるがよう
御座ろう』

と追つけ加えた。

世話人たちは、環へ詰め寄って、

『見事、斬るか』
みごと

と、糺した。
ただ

『斬る』

環は、昂然と、唇を噛んで答え、
こうぜん

『いざ！』

と、自分を叱咤するように、即座に、袴をくくり上げ、下緒を
しった
さげお

解いて、袖を片襷にからげた。
かただすき
つば

——だが、先に鰐を斬った真雄の一刀を受けてみると、故意に
あつ

斬り人が無理をした痕が歴然とその刃こぼれに読める。たとえば、
あつ

何んな伝世の銘刀でも、邪心をもって、折ろう曲げようとす
でんせい
じゃしん

れば、傷つかぬということはない。

刀は名鏡である、人は、止水の相でそれに溶け合わなければならない。一点の曇り、一点の揺るぎでも、心が動じれば、刀も狂う。

環は、まず怒りを鎮めた。
たまき しず

そしてただ、

『八幡』
はちまん

と、念じて壇上の鏑へ、発矢と刀を入れた。
ねん つば はっし

鏑は真二つに斬れた。

しかも刀は、元の儘だった。

『——ア。斬れた』

と、人々の間から流れた感嘆の声を聞くと、環の眦は、たらた
まなじり

らと、湯のような涙を垂らして、一筋の歡喜^{かんき}を、頬へ描いた。

多感なりし年少の日

一

兄の名は、雪^{そそ}がれた。——これでいい！
環は、刀を返して、すぐ身を退^ひきかけた。
すると箕兵衛直胤が、

『待たつしやい』

と、声をかけた。

『何ですか』

『おぬしは、山浦真雄の弟じやそうなの』

『そうです。それが何うかし^どましたか』

『いや、賞^ほめてあげるのだ。そう恐い眼でわしを睨むことはない。

兄思いな情は、見上げたもの』

『未^{みじゆく}熟ではあるが、兄の刀も、そう鈍^{どんさく}作でないことは、お認めになつたらうな』

『いや、分らぬ』

箕兵衛直胤は、首を振った。

『——一振ぐらい試したとて、そう易々^{やすやす}、折紙は付けられん。
あやま
過ちの功名ということもあるからの。今、見事に斬れたのは、お
ぬしの一念が斬ったので、刀が斬れたのではあるまい』

『ば、ばかな』

『今朝^{けさ}から、わしの作は、十幾振も試しておるのじや、それと互
角には申されまいが、口惜^{くちお}しくば、猶、二刀三刀、数を重ねて、
試してみよ』

『おお、幾らでも』

『門人^{もんじん}——真雄の刀を取り寄せて、次の据物を斬らせてやらつ
しやい』

『それには及ばぬ』

環は、自分の腰に横たえている刀の柄を打つて、

『兄の作は、ここにもある』

『ムム、自身の差料か。さしりよう猶よかろう。——して、据物には、

何を置くか』

『何なりとも』

『よし』

直胤は、古ふるかぶと兜かぶとの鉢金はちがねを、壇に据えさせた。

そして自身、起たつて来て云った。

『あの目録にも見える通り、わしの作でも、此品これではないが、他の鉢金を斬っておる、おぬし、口ほどならば、これが斬れぬことはあるまいか』

『……………』

何の！ と環はそれを見つめた。

『どうじゃ、行^やるか』

『致します』

『然らば——』と、直胤は身を退^ひいて、
『拝見しよう。やらっし
やれ』

と云い放った。

二

環は再び、身構えを取った。

身ではない、心である。

こういう感情の中で、すぐ心を無念無想に取り戻すことは、難かしいことだった。

けれど直胤が、わざと若い彼の心を怒らせるような事を云ったのも、一つの術策である。環はそれと察したので、努めて、微笑をもつて、心を紊みださなかつた。

（これしきの物が斬れないで何うしよう）

環は、自分の差料へ手をかけながら、強い、信念をふるい起した。

身に帯びているこの刀こそ、自分が十六、七歳の頃、赤岩明神に祈誓きせいをかけ、兄は本鎚の座にすわり、自分は相鎚あいづちに對むかつて、

夜となく昼となく、兄弟ふたりの魂を火として、打ち鍛えた刀なのだ。

兄と自分との合作である。

しかも、この焼刃やきばの中には、母の真心まごころさえこもって居た。兄弟ふたりが、一心不乱になっていると、母は絶えず、仕事場へ宥いたわりに来て、

（才才、精が出るのう。兄弟ふたりの合す鎚音は、御先祖様の御座らっしゃる土の下まで響いて行こうぞ。今でこそ、赤岩村の佗わびしい郷土、鍬くわを片手に、飼蠶かいこと共に起臥おきふししている土侍じゃが、お許もとたちの御先祖様はといえば、足利あしかがの世の頃まで、今も昔のままに居るこの辺り一帯とりでを砦として、南朝方へお味方した山浦常陸ひたち介

というた名だたる勤王の名将じゃぞ。——刀を打つなら、御先祖様のような、お心になって打て。——鍛冶屋職人になる程なら、鍬くわを持って、土を耕した方が、どれほどましか知れぬぞ。——侍のたましいを打つ身は、侍以上のたましいでなくてはなるまいが）と、骨休めにと、茶を入れて、宥わり慰めてくれる間も、母はそうした訓くん誠かいを、兄弟ふたりに対して、忘れなかった。

その後。

故ゆえあって、自分のみは、刀鍛冶を断念して、大石村の郷士庄屋長岡家ながおかけへ、養子に行ってしまったもの——今も、母の訓おしえは、心にある、兄の鎚音は、耳にある。

そして、自分の当時の一心と。

こう三つのものの結晶けっしょうが、この刀ではあるまいか。

（どんな物でも、斬れぬはずはない！）

彼の信念はそのまま、不動の体たいになって、刀は、静かに頭上へあがった。

——そして、ぐっと、下腹に、宇宙の気を吞むように力がある。

その丹田たんてんの力が、満身の気となつて、ええいつと、一声の下もとに肱ひじが下ろされようとした間髪——

『あつ、待った！』

と、箕兵衛直胤が、ふいに、声をかけて、彼の切先きつさきの前へ迫った。

——はつと思わず氣を弛めると、直胤は、据物の古兜へ手をか
けて、少しその位置を直した上、

『かんじんな的が少し曲がつているげな。さ、改めたぞ。やらつ
しやい』

と、身を退いて、又、じいつと環の手元を見つめていた。

(要らざる介錯)

と、思いながら、環は、刀を持ち直して、一気に、兜の上へ斬
りつけた。

ばん！ と異様な音響がして、何事ぞ、刀は二ツに折れて飛ん
だ。

利鎌とがまのような刀の欠けは、宙へ上つて、ぶんと、観衆の中へ落

ちた。

——どつと、その人々がうごく。

同時に、直胤の弟子、そのほか、かかる事あれかしと密かに祈つていた連中は、手を打って、わつと嗤った。

『……し、しまった！』

鐐つばからわずか一尺ほどしか残っていない半身の刀をみつめたまま、環は、茫然——われも無くなつてしまった。

動くことすら、忘れていた。いつ迄も、折れた刃やいばを、その儘、身を硬こわばらせて、髪をそそけ立てていた。

唇は、見るまに、色を失った。慚愧ざんきの眼からは、とめどなく、

ぼろぼろと涙がつたわってくる。——周囲の嘲罵ちやうばも、侮蔑の眼

も、頭が痺^{しび}れて、聞えなかった。

『——環つ、環つ、退がれつ。……もうよい、引き退がれ』

誰か頻^{しき}りと、自分の腕^{かいな}を組んで、引つ張る者があつた。

彼の脚は、墓石^{ぼせき}みたいにな、動こうとしなかったが、ふと、そ

の人の顔を見ると、柘植嘉兵衛であつたので、はつと弛^{ゆる}むと、

『これッ——見苦しいッ』

嘉兵衛は、共に泣きながら、酔いどれでも引つ摺^{つか}むように、無理無態に人混みから山門の方へ、彼を拉^{うっ}して行つた。

『す、すみません！ ……。嘉兵衛様』

山門の下まで来ると、環は、声をあげて泣き出した。

嘉兵衛も、^{ひじ}肱を曲げて、顔を^{おお}蔽いながら、

『な、なにを泣く。泣くことがあるものか。お前たちはまだ若い。

いくらでも……いくらでもまだ……^{さき}将来はあるんだ』

『^{きつと}屹度！ ……屹度！ ……今にあなたのお顔は立てます』

『ケチなつ。馬鹿つ』

嘉兵衛は、^{おえつ}嗚咽しながら、怒った。

『わしの面目など、何^どうだっていい。口惜しいのは、もつと大き

な事だ。兄に会ったら明らさまに、きょうの仔細^{しさい}を伝えておけよ。

……よ！ よ！ ……^は穿き違えて、遺恨^{いこん}を含んじやならぬぞよ。

自分を励ます鞭として、一層、精進してくれとな……。そう伝えるのだぞよ』

『わかりました。……わ、わかりました。じゃあ、柘植様、又何日か、お目にかかります』

いい捨てる、顔も見ず、嘉兵衛の手を振り切つて、環は一散に馳け去つた。

真昼の道も、真つ暗だった。環は、恥に打たれて、陽も見られなかった。往来の人に、顔も見られるのも嫌だった。

『おおーい。おおいっ……。待てようっ』

誰か、後から追いかけて来る者がある。編笠を被つて、干飯袋に旅の持物を入れ、短い義経袴の袴腰にくくり付けている若

者だった。

町の辻で、若者は環に追いついた。

後から肩を掴んで、

『待てと云ったら。——っんほ 聾か、貴様は』

『何！』

気が立っているので、環も、きらつと眼を研いで振向くと、編笠の中の顔は、自分よりもつと若い——まだやつと十七、八歳かと思われる少年武士なのであった。

が——年上の環よりは、どこか沈着で、大人びている口吻くちぶりであり、態度も鷹揚おうように、

『何を怒るのか。おこ わしは貴様に好意を持って、わざわざ追いか

て来た者だぞ』

『怒ったわけではないが、つい、気の紊みだれていた矢先なので』

『そんな事で何うする』と年下のくせに、少年はそう窘たしなめて、

『長国寺の刀試し——どんなものかと、わしも見ていたのだが——
貴様はうまうまと、箕兵衛直胤の手に乗ったのだ』

『えっ、ど、どうして？』

『二度目だ。——あの時、貴様が最初に気合をこめた儘、やって
しまえば、古ふるかぶと兜の鉢金ぐらい、きつと斬れていたに違いない。
老獪ろうかいな相手方は、その鋭い気を抜くため、わざと待てと声をか
け、何の必要もないのに、兜の位置を少し直したりしたのだ』
『ああ、そうだったか』

『もいちど帰り給え。こんどは拙者が斬り人に立ってやる』

『いや、御好意は有難いが……止そう』

『見ていた他人の拙者せつしやでさえ腹が立つのに、残念ではないのか』

『もう、古兜など、斬りたいとも思いません。他日、もっと、もつと、大きな望みを斬り落してみせる。……だが、先刻さつきの取乱した失礼は、おゆるし下さい。御好意は忘れずに置きます。貴方あなたの

御尊名は』

『拙者は、長州の藩士はんし、金子重輔かねこじゆうすけという者。この松代藩で有

名な佐久間象山先生さくまどうざんの名をお慕したいして、遙々はるばる、江戸から廻り道

して立ち寄ったが、生憎あいにく、象山先生は御不在、むなしく帰って

来たところだ』

『わたくしは、赤岩村の郷土、山浦環。又どこかでお目にかかる折もございましょう』

『じゃあ、何うしても、もう試し場へは戻らんのか』

『はい。たとえ先に奸策かんさくがあつたにせよ、不覚はどこまでも不覚です。これから行つて、長国寺の大吊鐘を斬つたところで、まだまだ、きょうの自分の気持は拭ぬぐわれません』

『こんな山国の藩に、象山先生のような新知識が生れたのは、不思議と思つていたが、信濃しなのにはいろいろ変り者が居るのだな。……それもよからう、では、おさらば』

と、金子重輔は、すたすた去つてしまった。

恋こいぎぬ
砧た

一

父のない後は、長男が家の柱はしらだった。

母でも、老いての後は、家長の彼に、気がねをした。どんな事でも、彼がうなず頷かなければ、決めなかった。

だから、半農半武士はんのうはんぶしの郷土に過ぎない、ここの小さな家族制

度でも、一国にたと喩えれば、長男のことは、主君のことはみたい

であつた。

足利以前から、この信濃の山間、小諸^{こもろざい}在の赤岩村に、十何代も続いて来ている旧家の——^{たくま}逞しい梁^{はり}や、黒光りな柱などと共に、——それは今でも厳^{げん}として、失われていない山浦家の家風なのであつた。

『真雄^{さねお}や、ことしは、雪菜^{ゆきな}がよう漬^つかつたぞよ』

ひろい鍛冶土間の片隅に、六畳ほど休み場がある。

母のお菅^{すげ}は、茶盆をそこへ置いて、鞆^{ふいご}に向つてゐる長男の真雄へ云つた。

『すこし休まぬかの。茶を入れて来ましたがな』

真雄は、刀の地鉄^{じがね}にする、玉^{たまはがね}鋼を熔かす仕事に、顔まで、

ほのお
炎にしているので、

『後で』

と、云った儘、母の方も見なかった。

お菅は、すこし耳が遠かった。もう茶を注^さして、

『今の、去年の漬^{たる}込みを、一樽開けてみたところ、よい色に漬^{たる}か

っているわの。じゃが、其方^{そなた}が箸^{はし}をつけぬうちは、誰にも、喰^たべ

さす事ができぬによつて、一箸、喰^たべてみておくれ。——余りそ

う精をつめても、体の毒であるに』

体——母にそういわれると、真雄は、自分だけの体とは思えな

かった。

『や、すみませんな。では、戴きましよう』

手桶ておけの水で、ぎつと、手を洗つて、休み部屋へ、腰かけた。

『今、かかつている仕事は、誰方様のお刀じやの』

『松代藩のお寺社奉行、山寺源太夫様の御注文でござります。他ほかならぬ柘植様のお口添えで、素人鍛冶のわたくしなどには、身に過ぎた御下命と、冥みよう加がに存じて、玉鋼から、吟味に吟味を致しておるのです』

『まあ、そうかの』

と、母は欣うれしそうに、齒の抜けた口に、雪菜の一茎くきを入れて、もぐもぐ唇くちをうごかしていたが、真雄の顔つきの好いのを見て、そつと云い出した。

『又かと、うるさく思わつしやろが、弟の環たまきのう、もう、養子先

の家を出てしもうた事じやに。……何とか、忪こらえて、もいちど家へ入れて下さらぬか。そなたも慥しつ乎かりした相鎚あての打ち人がないと、常々、云い暮している折ではあるし……。真雄まどうよ何うじやな？』

二

長国寺の噂うわさは、松代から、四、五里しかない赤岩村へは、すぐ聞えてきた。

それから間もなく、環が、養子先の長岡家から、飛出してしまつたという噂が、大石村から、近郷きんごうに伝わつた。

（よもや？）

と、兄の真雄も、母のお菅も、強^しいて心で打ち消していると、

環は、或る夜そつと、裏口から生れた家へ歸つて来た。

そして、裏の納屋^{なや}で、長いこと母と密^{ひそひそ}々話した揚句^{あげく}、彼の母

は涙ながら、真雄の所へ来て、その氣持を訴えたが、

（家へ入れるわけには行きますまい）

と、真雄は、養子先へ義理を立てて、肯^きかなかつた。

元々、環と、養子先の娘とは、尋^{じんじょう}常^{じょう}な縁組ではなく、若い

彼と彼女との、恋の始末を、強^きいてそこに正式^{せいしき}化して落着けたものであつた。

それまでにするには、仲へ入つた人々にも、娘の親、親類にも、悲嘆や苦勞を随分とかけさせている。曲げられない旧^{きゅうへい}弊^いの家

憲や、困難な事情も、どちらも可愛い一人娘と、息子の為にと、曲げさせた上、やつと纏まとつた両家の縁組なのだった。

それはまだいいとしても――。

環が、家出したなら、では生家さとへ入れようとは、何うしても真雄として云えない理由が、もひとつある。

環の妻には、もうこの春、生れたばかりの子があるのである。

その子を捨て――又、飽あきも飽かれもせぬ恋妻を捨てて――何で環は養子先を飛び出してしまったか。

弟のその気持を考えると、真雄としては、涙があふれてくる。掌てをあわせて、兄思いな、その情熱へ、伏し拝みたい。

『……おつ母かさん、折角せっかくですが、何度仰おつしやっても、環を家

へ入れるなどという事は、許されるものではありません。もう、云わないでください』

真雄は、わざと、^{にべ}膠なく云った。

そして、辛いその胸を、^{つちふいぞー}鎚と鞆へ打ち込んでしまおうとするもののように、休み部屋から、腰を上げると、

『あ。お待ち……待っておくれ』

彼の仕事着をつかんで、彼の母は、^か嘗つて一度も、子に見せた事のない程な、悲しい声^{ふる}を顫^{ふる}わせて^{すが}縋^{すが}った。

『でも、真雄や。……^あ彼^あれの胸も察してやったがよい。環は、^わ吾^わ儘^{がまま}や自分の移り気で、養家を出たのではありませぬぞ』

『何であろうともです。——あれ程、御苦勞^{なこうど}をかけた媒人^{がた}方^{がた}や、

先の長岡家に対してだつて、今更』

『それは、この母が、長岡家の門前へ行つて、土下座しても詫びましょう。彼の^あの子の、氣持を聞けば……わしの命は縮めても、望みのように、家へ入れてやりたいと思うのじや』

『ば、ばかな事を、仰つしやいませ。おつ母^かさん、そのように甘いからいけないのです。何で叱りつけて、追い返して下さらないのですか』

『どうして、追い返せよう。——飽きも飽かれもせぬ妻を捨て、生れたばかりの嬰兒^やも残して、此家^{ここ}へ戻りたいという環の心を、そなたは何うして酌^くんでやらぬのじや』

『……馬鹿です、彼弟^{あいつ}は』

『な、なにをいうのじゃ』と、お菅は、懐中ふところの乳呑ちのみでも庇かばうように、又、母性の聖しょうごん嚴げんを、髪かみの毛けに逆さかだてて、叱咤しちやするかのうように、

『それへ、坐りなされ！ ……真雄まおつ、坐りなされっ』

『なんですか』

『何なにといやつた。——そなたは、弟あの罰ばつが中あたたるとは、思いませぬか』

『思いませぬ』

母ははが、本能ほんのうの愛あいに、乱みだれれば乱みだれるほど、真雄まおは冷静れいじやうになつて、鍛冶土間かじどまの大地ちへ畏かしこまつたまま、冷ややかな面おもてでそう答こたえた。

三

『ようまあ。兄の身が、そのような無慈悲な言葉を』

お菅^{すげ}は、声を励ましたが、子の冷然として、強い顔を見ると、

すぐ氣も挫^{くじ}けて、むしろその不機嫌を取^{とり}做し加減に、

『そなたに、環^{たまき}の心が、解けぬ筈はないじやろが、よう聞いて賜^た

も、……環はな、もいちど、兄の片腕になつて、其方^{そなた}を松代の直

胤にも勝る刀工にしてみせると云うのじやぞ。……御先祖山浦常^ひ

陸^{たち}介様以来の家名を、踏みにじられて、それを雪^{そそ}がいで措^おこう

かと、健氣^{けなげ}にも、念じているのじや』

『おつ母さん』

『なんじゃ』

『あなたは、環を、何処どこの子だと思っているんですか』

『此身このみが生んだ子。何をいうのじゃ』

『さ。——それが大きな間違いです。環はすでに、山浦家の子ではありません。長岡家へくれた養子です。長岡の家の恥辱なら、そうして、雪ぐもよいでしょう。——だが、山浦家には、不肖ふしょうながら、真雄という者が居りまする』

『才、それは道理の。……じゃが真雄や、環とても、この儘、妻も子も、生涯捨て切るつもりではあるまい。何よりは、そなたに取って、共に鎚つちを持ち、刀の鍛錬を究きめるに、よい相手がない。弟子もない。それを環は苦にしていやる。——今、早速に、其方

が鍛ちにかかつている山寺源太夫様の御下命の品にせよ、ここで
一際、優れた刀を鍛ち上げねば、名折れの上の名折れになろう
と』

『よ、よけいなことだ』

『では、そなたは、長国寺でうけた恥かしめを、口惜くちおしいとも、
家名の恥辱とも、思わぬのか』

『こちらは、元より百姓郷土、農事の片手間に、鍛っている仕事
です。——先は、天下の刀匠水心子の高弟として、藩から高禄を
いただいている本業の刀鍛冶ではございませんか』

『猶なほのこと、そのような名だたる者が、卑劣な、刀試しを開いて、
しかも大勢の前に、こちらの恥を曝さらしなどする事が、黙って、捨

て措^おける事であらうか』

『知らぬ顔していればよいのです。それを環ごとき若輩者が、要^いらざる出洒^{でしゃば}張りをしたればこそ、恥^うの上わ塗りをしでかしたのだ』

『なんで、そのように、環を、憎く憎くと取りなさるのじや』

『腹の立つのは、直胤の一門より、てまえに取っては、むしろ出洒張り者の弟です。子供の時から、血の氣ばかり多くて、困り者だと思つていたが』

『そう云わないで後^ご生^{しょう}じや、この母に免じて、彼^あの子を家へ』

『いけません。てまえが、此^{この}家^やの主^{あるじ}でいる以上は、一足でも』

『入れることはならぬか』

『知れたこつてす。折れる刀、曲がる刀、どんな鈍^{なまくら}刀を作ろう

と、わたしはわたしだ。いちど養子に行つた者を戻して、その弟の腕など借りたくはありません』

『でも、養家を出ぬ先なら兎に角、遺書までして、出て了うたもの』

『勝手にするがいい。……相談ずくで、飛出したなどと思われては、猶更、世間へも、先へも義理がすみますまい』

『頼むつ……』お菅は遂に、がばと、泣き伏して、畳へついた掌を合せた。

『真雄。そなたには、内密でいたが、彼れが家出して、わしを訪ねて来た夜から、実は、裏の納屋の中へ隠して、そつと、飯をくれてあるのじや。……今更、どこへ追いやられようぞ、どうぞ

量^{りようけん} 見^{けん}して、この仕事場へ、入れてくだされ』

四

『おつ母さん！ ……』

『……………』

『そんな事、聞かないでも、真雄は知っております。——毎夜のように、家の近くを、うろうろと彷徨^{さまよ}っている嬰兒^{あかご}の泣き声でも分っている。あれは、環が捨てて来た妻のお咲が、子を抱いて、見えない良人を、探しに歩いている声ですぞ。おつ母さん！』

『……………おいのう』

『あなただつて、あの嬰兒あかごの声は、お聞きでしょう。新妻の瘦やせた姿もわかるでしょう。子を抱いて、捨てられた若い女房が、どんな思いでいることか』

『……………』

お菅は、咽むせび泣いて、薄い体を、よよと畳おののに顫ふるかせた。

『たとえば、この上、山浦真雄が、いかに人から唾つばをうけようが、弟を、入れる事はできません、断じて出来ない！ ……ああ、もう止そう、おつ母さん、お体に障ります、やめて下さい、やめて下さい』

真雄は、韃ふいごの前へ馳け寄つて、どつかと、筵むしろの上に坐ると、金か火箸なひばしを把とつて、真つ赤な溶鉄となつた玉鋼を、火土ほどの中から引

き出した。

そして、鉄敷かなしきのうえに、それを置くや否、小鎚こづちを把つて唇を

噛みしめ、一念に鍛ち初めた。

ばッ、ばッ、ばッ——と鎚の先から焰ほのおの屑が飛んだ。眼にもい

っぱいに赤い涙がたまっている。涙はこぼれて、鋼はがねを冷まし、冷

めた鋼は又、火土ほどの中へ投げ込まれて、彼の苦しい胸あえの喘ぎを吐

くように、韃いの呼吸きにかけられた。

——と、すぐその韃の上の竹窓越しに、ちらと、人影が映さした。

弟の環だった。

『兄貴、兄貴』

『あつ、環だな。——まだ居たのか。そこらにうろついていると、

とみず
砥水を浴びせるぞ。とつとと、大石村へ帰れ』

『もう、会わぬぞ』

なに
『何ッ』

『——おつ母さん、お達者で』

お菅は、駈かけ出して、

『環やあーっ』

さけんだが、彼の姿は、もう先祖以来の おおけやき 大櫓に囲まれた家の外へ走り出して、千曲川の上流に沿う きりだし 断崖の道を——その故郷ふるさとの少年頃から駈かれた道を——奔流の流るる方へと、ただ驀まっしぐらに、顧みもせず、どんどん駈かけて行つてしまった。

五

春は去つたが――

又、やがて、彼女の彷徨^{さまよ}う夜の数も減^へつたが――。

でも猶、折々に、時^{ほととぎす}鳥の啼きぬく闇の夜など、山浦家の裏

に、ぽかっと、白桔梗^{ききよう}の花のような、女の顔が、悲しそうに佇^{たたず}

んでいることがままあつた。

環の妻のお咲^{さき}だつた。

乳呑み子の名は、梅作^{うめさく}といつた。

稀^まれに又、その梅作のかなしげな泣き声が、千曲^{ちくま}の水の咽^{むせ}びか

とも聞えることがある。

そんな晩——

夜業よなべの鎚つちを投げ出して、真雄は、そつと闇へ抜けて行つた。

そして、彼女が、やがて悄々しおしおと、家路の方へ帰るのを、見届けると、ほつと胸を撫なでて、

『馬鹿め！ 血の気が多すぎる！』

やり場のない怒りを、彼は、星へ向つて罵ののつたりした。そうかと思うと又、

『——弟よつ。帰つて来いっ。ここは山家だ。こんな平和なところが何処にある。——世間にかまわず、帰つて来いっ。母が丈夫でいるうちに、帰つて来てくれ。ようつ、弟つ……』

争鬭の世間へ、人中へ、とうとうと絶えまなく奔はしつてゆく千曲

川の激流に声を託して、家の前の断崖きりぎしから、独りでこう、おろおろと、叫んでいる夜もあつた。

秋になると――ぱったり、お咲のすがたも、児の泣き声も、しなくなつた。

『もしや、煩病わづらっているのじゃないか。ひよつとして、首でも縊くつて？』

と、そんな不吉まで、案じられて、或る夜、真雄はそつと、環の去つた養家の垣の外に潜ひそんでみた。

もう寝しずまつた夜更けであつたが、月の白い縁先に、お咲は、砧きぬたを打つていた。

打っている衣きぬは、嬰兒えいじの冬着らしかった。

恋妻は、やがてよき母となつてゆく。——だのに、環は、どこにいるのか。

真雄は、月の下を、黙々と帰つて来た。

その年——天保六年

秋もすぎ、雪に交じつて、木々の冬葉が舞う空になつても、真雄は、とうとうまだ一作も、刀を鍛^うち上げていなかった。

咲き出づる時

一

『内蔵さん。……どうしたのさ。内蔵さんてば。……弱いくせに、飲めもしないお酒を、自暴に飲むんだから、困った人ねえ』
湯女のお寿々は、持て余したように、上り口へ打つ伏したままでいる若い浪人の体から手を離して、呆れ顔に、ただ眺めてしまった。

浪人は、環であつた。

ここは、上田の城下に近い別所の温泉場であつた。まだ故郷に遠くないので、身を恥じてか、環という名を捨て、別名の内蔵助をもじって、内蔵吉と名乗っていた。

お寿々は、通い湯女で、小さいながら、湯町の裏に、一軒持っている。——去年、家を去つて、一先ずここの温泉宿に沈湎ゆやど ちんめんしていた環は——いや内蔵吉は、その宿でお寿々の世話になつたのが縁で——金がなくなつた頃からつい女の家へ移つていた。

お寿々は、彼の苦悶を知るよしもない。じつと、沈湎ちんめんしているかと思えば、ぷいと出て、酔つて帰る。

湯町に巢喰う遊び人の仲間に入つて、博奕わるさをしているのも知つていたが、それでも男に、愛想あいそが尽きたとは思わないお寿々だつた。

『風邪かぜをひいても、知らないからいい。——ほんとに、この人は』
口が酔すっぱくなつたように、すぐそこの鏡台と長火鉢の間へ、

つんと坐りかけたが、やはり氣に懸^かけずにはいられないで、

『ね……起きて、座敷で樂に、横におんななさいよ。後生だから』
肩を揺^ゆすぶると、上り框^{がまち}にしやがみ込んで、踏み板へ、涎^{よだ}れを
垂らしていた内蔵吉は、

『う……うるせえなあ』

『うるさいじやありませんよ』

『水^{みづ}をくれ。……水、み、みずだ』

『上げますから、家へ上りますね』

茶碗に、汲^くんで渡すと、ぐっと飲みほして、

『お寿々、いろいろ世話になったなあ』

『何を云つてゐるのさ、この人は』

『いや、酔っちやあいねえ』

『それだけ酔つていればたくさんでしょ』

『五合や一升で、性根しょうねを失つてたまるものか。本性だ。お……

おらあ、本性で礼をいうんだぜ』

『そのうち醒めるでしょう。何でも、仰さつしやいよ』

『此家ここへ来たなあ、去年の春の末だったかなあ。あれから、一年半、もう秋だ……早いなあ』

『ホ、ホ、ホ、ホ。……それから』

『洗濯物の世話、小費こづかいの世話、年月は短けえが、浅い恩たあ思わねえ。別れた後も、年上のおめえだから、姉さんだと思つて、忘れずにいるからな』

『いやだねえ、手なんぞついて。格子口から見えるじゃないか。

見ツともないから、もう引つ込んでくださいよ』

『引つ込むんじゃねえ、こ、これから、おらあ旅立ちだ。……じ

やあ、姉さん御機嫌よく』

『あらつ——』と、お寿^{すず}々は、土間へ飛び降りて、

『どこへ行くんですよ。そんな、だらしのない恰^{かつこう}好して』

『旅へさ』

『えっ……。本気かえ、おまえさん』

酔うと青白くなる酒の性である。

内蔵吉は、じつと、お寿々を見つめた。お寿々には、男が、冗

談なのか、本性なのか、解らなかった。

『いつも、与太ばかり云っているから、今日も、それかと思うだ

ろうが、実あ先刻、湯宿の二階から、いきなり名を呼ばれたので、

はつと仰ぐと、松代藩の柘植嘉兵衛というお人。おらあ、夢中で

逃げ出した』

『仇とでも、狙われているんですかえ』

『仇どころか、寝るにも、足を向けねえつもりの御恩人だ。だが、

その御恩人に、この姿は、見せられねえ。——総身に汗をかいて、

沁々と、おらあ今日は、考えたのさ』

『考えたとは？』

『こうしちや居られねえ身だ。何処ぞへ行つて、おらあ生命^{いのち}がけで、日本一の刀鍛冶に成つて見せなければやアならねえ。——身の出世に、あくせく足搔^{あが}くわけじゃあねえよ。——そうしなければやあ、済まねえお人が、柘植様、おふくろ様、兄貴、それから……それから未だ……幾人となこの世にいるんだ』

『だから、わたしを、捨てるんですか』

『——と、大概、極めつけて来るだろうと思つたから、何もいわずに、行こうと思つたが、酔いつぶれの仮面^{めん}をかぶつて、一^{ひと}言^{こと}、礼に來ただけでも、可憐^{しおら}しいと思つてくれ』

『嫌です。何が、そ、そんな口が、可憐^{しおら}しいものか』

『堪忍かんにんしろ！ お寿々』

とんと、女の胸を突いて、内蔵吉は格子の外へ、すばやく姿を消してしまった。

お寿々は、甲かんだかい声をあげて、往来まで走ったが、すぐ人目を思つて、裸足はだしで泣く泣く歸つて来た。

その翌日、彼女の家は、戸が閉しまつていた。家財も、前の晩に、こっそり道具屋の手に移されて――。

三

あの後は、恩人柘植嘉兵衛も、さだめし辛い立場にあつたろう。

或は、藩の中で、けいはい軽輩の身では、自分以上の、苦境だったかもわからない。家老の矢沢けんもつ監物が後援する直胤一門の圧迫もあったろう事は、想像に難くない。

（その恩人へ！）

と、思うと、内蔵吉は、済まない——と胸で掌てを合せたぐらいでは居られなかった。

湯町の長脇差などながどすと、酔い歩いている醜い姿を、その人に見せた儘、振向きもせず、つい逃げてしまったが——それでいいだろうか。

（たとえば、十年先、二十年先に、一人前の剣工となって、詫びをするにしても、その長い月日の間）

と、恩人の惨心を思うと、居ても起つても、いられない。

ひよつとして、嘉兵衛が、その消息でも、赤岩村に残してある、老母の所へ便りでもしたら、母は嘆きのため、寿命をちぢめるかもしれない。

『そうだ……せめてこの気持を……柘植様だけにでも、洩^もらして去ろう』

冷たい秋の夕霧が、そう^{つぶや}呟いてゆく、彼の面^{おもて}を吹いた。
千曲の水に添って、彼は、野を歩いた、河原を歩いた。

そして、故郷の山へ、辛い顔を^{そむ}反向けながら、もう一度と、眼をつぶる心地で、松代の城下に近い、川中島の小島村まで来た。

そこの満照寺には、知っている坊さんがある。七日ばかりの逗^と

うりゆう

留れきをたのみ、身を潜めて、柘植嘉兵衛へ宛て、自分の心を披ひ瀝つぶした審つさな手紙を認めた。

『浄明さん。誰方どなたか、この手紙を持って、御城下まで、お使に行つてくれる人はいませんか』

『子供でよう分るお使ですか』

『ええ、お小僧で結構です。ただ、名宛の柘植様は、先頃、別所でお見かけしましたから、ひよつとしたら、お留守かもしれせん。そしたら御新造様へお渡しして、よくお願いしておいてもらいたいので』

『承知いたしました』

その使が出た後で――

『お世話になったが、明日、出立しようと思います。寺に有合せの、古^{ふるがさ}笠^{ふるきやはん}古^{ふる}脚^か絆^{はん}で結構です。お恵みねがいたいものだが』

『お易^{やす}いこと。……だが一体、どこへ行くんです』

『皆^{かい}目^{もく}、的^{あて}はございせん』

『的もなくて』

『どうか成りましょう。江戸でいけなければ上方、上方で人間になれなけれあ、中国、九州。——土と鉄^{かな}氣^けのある土地なら、鍛冶小屋の一軒ぐらいは、どこかに建ちましょう』

浄明はその晩、彼を炉ばたに招いて、芋^{いも}粥^{がゆ}に一杯の酒を温めてくれた。

（人に見られぬうち——）

と、翌る朝は、暗いうちに起き、浄明にも黙つて、そつと庫裡の横から戸を開けて出た。

朝の月が、まだあつた。

虚空山も、戸隠山も、黒姫も、眠たげな霧につつまれている。

ポトポトと、そこらの松や破れ廂やびさしから、露が降っていた。

——二足ふた、三足み、歩き出した時だつた。

露の音すら耳だつあけがた暁方の静寂しじまを破つて、ふいに、ぐわあん！

——と大空が鳴つた。

『おやつ？ ……何だろう』

川中島の疎林の上へ、ばツと、小鳥の影が埃みたいに立つた。
と、思うまに又、

轟ごうン——轟ごうんつ——

朝の雲が、裂けるかのような、強い響きである。

彼は、その音響に、氣をとられながら、仄ほの暗い山門の下を潜つた。そして石段を降りて、十歩も歩み出したかと思うと、

びゅるつ——

どこかで、烈しい弓鳴ゆなりのするように、空氣が鳴つて、轟ごう然と、十間ほど先の大地に、大砲の弾が炸裂さくれつした。

地を揺り上げられた心地で、はッと恟すくんだ途端に、小石交じりの土が、焰えん硝しょうのけむりと一緒に、びしやツと、飛んで来た。

『——あつ』

と、内蔵吉くらきちは、両手で、眼を蔽おほつた儘、大地へ俯つ伏した。

四

——暫くは、耳も氣も、遠くなっていた。

と、程なく。

野駈け支度の藩士たちである。ひどく狼狽した態^{てい}で六、七名ほど、ばらばらとここへ駈けて来るなり、内蔵吉の姿を認めて、

『やつ、怪我人が』

『^{ふかで}深傷か』

走り寄って、彼の体を抱き起した。

石交^まじりの土砂に飛ばされたのである。腫れ上った顔を抑えな

がら、

『何、大した事じゃございません』

内蔵吉は、やつと、気がついて首を振った。

『お離してください……大丈夫ですから』

『待て、手当をして遣^{つか}わす』

『それには及びません』

『駄目だ、顔から、血しおが流れておる、脚も、何^どうか致さんか』

『ようござんす、離しておくんなさい』

『待てというに』

よほど、責任を感じているとみえ、藩士たちは、無理に、彼の血を拭い、そして薬を塗りなどしていた。

『何うじやな、怪^け我^がの容^{よう}子^すは』

そこへ又、一人の組頭らしい藩士が加わって、心配顔に、内蔵吉へ直^じかに訊ねた。

塗^{ぬり}の陣笠に、金箔摺^{はくすり}の紋が、朝露に濡れていた。大きな口、濃い眉、そして滅多にない長面^{づら}の人物である。年ごろは三十がらみとしか見えないが、炯^{けい}々^{けい}と光る眼が、むしろ底気味わるいほどだった。

『砲術調練中の過失じや。鳥打峠の岩鼻を的^{まと}に狙撃しておった反^それ弾^{だま}が、射^い手^ての未熟のため、こんな所へ落下した。——許されよ。御浪士』

丁寧な謝罪なので、

『はっ』

と、内蔵吉は、思わず、大地へ手をついてしまった。いや何か
そういう人物の、威圧に打たれた感じだった。

『幸に、傷が軽微で、此方こなたも重畳じゃ。……歩行におさしつかえ
はないか』

『お案じ下されますな、さしたる事はございませぬ』

『どこかで、お見かけしたようだの。……はてな？ ……拙者は、
松代藩の学問所頭取、とうどり佐久間修理じゃが』

『あつ、では貴方様が、象山ぞうざん先生でございましたか』

『御浪士は？』

内蔵吉は、はつと、言葉につかえた。

蘭学、医学、海防、砲術、植林、化学と、あらゆる新時代の知識と、東洋の儒学とを併せて、今の時代的風潮の中に、巨人のように、諸藩からも仰がれている人が、正しく、礼儀をもつて先に名乗っているのに——嘘は云えない気がしたのである。

と——象山の次の言葉は、苦もなく、彼のためらいを救ってくれた。

『ウーム、思い出した。昨年じやったか、長国寺の寺内で、刀試しの折に見かけたことがある。——その折の山浦真雄が舎弟ではなかったかな』

『はいっ……』と、是非なく、
『山浦の愚弟にござりまする』

と、内蔵吉は、又、面伏せに、頭おもふを下ずげてしまった。

五

今の姿は、誰にも知られなくなかった。然し佐久間象山ほどな人が、兄の真雄の名を知っていてくれたのは欣うれしい。

象山も、兄の作刀を持っているのだろうか。持たない迄も、観ているに違いない。

刀試しの日も、居合わせていたといえ、刀の鑑識かんしきもあるに相違ない。訊いてみたいものと思った。

——が、内蔵吉は、体の痛みを覚えるとすぐ、

（この人に、そんな事を訊いたら、きつと笑い草だろう）

と、怯^{ひる}んでしまった。

此の人の家には、世界の海陸を画いた大きな地球儀があるという。又、軍艦を造る造船学の書、西洋兵術から砲術火薬の書物——そんなもので室^{へや}が埋まっていると聞いた。

三尺に足らない刀の——刃がこぼれたとか、曲がつたとか——そうした問題は、此の人の眼からは、蟻^{あり}に齒^はが有るか無いかを、争うような、小さな問題としか聞えまい。

『旅支度の様子らしいが、どこへお出での途中じゃな』

『はい……』と、これにも又、内蔵吉は正しく答えかねて、唯、
『江戸表まで参りまする』

と云つた。

象山は、聞くと、

『ほう、江戸へか。儲^{さて}は、遊学かな。いい事じゃ。若い者はどし

どしと、中央へ行つて、日本が今、世界の中でどう動いているか、
又いかに我が国が今——又将来、多事多難な時代の潮に向いかけ
ておるか。そういう事にも、篤^{とく}と、眼を啓^{ひら}いて来なければいかん。
饑^{はなむけ}別いたそう』

と、矢立から筆を出して、自身の扇子へ、さらさらと、一枝^しの
桜花^{さくら}と、一首の歌を書いてくれた。

人みなも

咲きいづる時を

あやまらで

さくこの花に

ならえとぞ思う

びっこ
跛行と鉄車

一

『今だ。咲き出づる時は今だ。おれの年頃も、世の中の黎明^{あけ}るの

も。……何だか、そんな気がするなあ』

彼は、跛行^{びつこ}をひきひき、峠^{とうげ}を越え、又、峠を越えて、東へ行つた。

休むたびに、象山から餞別^{せんべつ}にもらった扇子を出して見ては、

『——人みなも、咲きいづる時をあやまらで、さくこの花にならえとぞ思う』

を、何度も口で誦^{うた}つてみた。

深い谷をのぞいた。そして、高い秋の天^{そら}を仰いだ。

『なんだ！ 意気地のない』

彼は、勃然^{ぼつぜん}と、自分に肚^{はら}が立った。象山が何者だと思うので

ある。こんな扇子をもらって、有難がっているような事で、何う

して、大志を抱いて成すことが出来よう。

彼は、扇子を、谷へ投げた。

白い蝶ちようみたいに、それは千仞じんの底へ、吸われて行つた。

『おれは、おれの道を、歩いてみせる！』

そう思つて、高原にかかった。雲は、跛歩をひく足よりも低かつた。

芒すすきの果から、濛もうもう々と、黄色い砂塵さじんが立つて来た。

二

近づくに従つて、それは一隊の牛に曳かせてくる鉄車だと分つ

た。およそ二十台もあつた。菅笠、陣笠、布笠ぬのなど、汗にまみれた武士や足輕が叱咤しったして、牛と人足とを励ましてくるのである。

新発田藩御用
しばたはんごよう

車の一台一台に、木札が打つてある。

今日も、彼は又見た。それは大砲や西洋式の小銃や、火薬箱を積んだ輸送隊である。

上田、松代、松本の諸藩、榊原家さかきばらけの隊伍たいごにも、これで会うのが二度目だった。——彼はその砂埃りを浴びて摺すれ違ちがうと、急に心が暗くなつて、道にも迷う気がして来た。

『これからの戦争に、鎚つちの先で打つ刀などが、物の役に立つだろうか？』

そう考えずにいられなかった。

『調練場で撃つのでさえ、あれほど威力のある大砲。——それにひきかえて、鎚の打ち方の、火加減の、湯の秘伝のと、一本の刀にも、血を吐くような苦しみをして、あげくに、折れ易いとか、曲がるとか、死んだ末代の先までも、とやかく云われる刀鍛冶と
——』

彼は、ふと、

『止^よそうか』

と、嘆息^{ためいき}ついた。

そう思うと、一步もあるけなかった。道ばたの草叢^{くさむら}へ、どっ
かり腰をくだいてしまう。

うつろな眼で、雲を見ていた。——と、母の顔が思い出された。兄の姿、妻の窶^{やつ}れ、子の泣く声。

『——ああ、解らなくなつた。象山先生も、何とか云つた。日本は今、うごいている。行く手には、国難が横たわっている。——そんな意味だつた。何だか、おれの身を云われたような気がしたが』

いくら雲を見つめていても、彼には、時勢が映^{うつ}らなかつた。日本の土の上に享^うけた生命である以上、その身自体が、一つの小さな国体であり、国の迷い国の悩みと共に在ることを——その時まだ、彼のうつろな頭には自覚できなかつた。

『もしもし、間違つたら御めんなすつて』

と、彼方かなたから急ぎ足に來た足ごしらえのよい町人が、ひよいと、
疲れた彼の顔の前で、足を止めた。

『もしや貴方様は、山浦やまうら内蔵助さまと仰つしやいませんでし
うか。てまえは、松代の飛脚ひきやくでございませうが』

『え、飛脚屋。——いかにもわしは、山浦だが』

『柘植嘉兵衛様からの御手紙でござりまする』

『おお、嘉兵衛どのから、追いかける御返事か』

飛脚は、江戸へゆく途中とみえ、それを渡すと、鳥影のように、
高原の道を先へ行つてしまった。

いそいで、封を切つてみると、細々こまごまと、故郷の消息しるが誌して
ある。

『……ああ、まだ母は、生きているな』

すぐ彼の眼は、潤みだした。

（——兄の真雄も無事、妻子も無事、赤岩村には、何の後顧もない。然るにそちは、何とした事だ。別所の湯町で、ふと姿を見た時、わしは泣いた）

手紙の途中で、彼はそれを拝んで、

『おゆるし下さい。おゆるし下さい』

声を出して云った。

（——だが、満照寺まんしょうじからの、消息に接して、わしの嘆息は、欣びに一変した。当初の志を抱いて、江戸へ立つ由。大慶この上もない。その初志を貫つらぬかねば、そちが養家を出た苦衷くちゆうも、何の意

味もなくなつてしまふであらう。何事も、かえりみ顧ずに行け。そしてよい師に就くことが肝腎だかんじん（）

と、懇切なことばの後に、江戸へ出たら、同封の紹介状を携たずさえて、幕府のお旗本、窪田助太郎くぼたどのの門をお訪ねしてみるがよい——と結んであつた。

彼は、迷いの霧を、払われた心地がした。この一人の恩人に酬うらいるだけでも、剣工として立つ意義がある。

『そうだ。たとえ一振でも、末代に残る銘刀めいとうと称いわれる刀を鍛うたぬうちは、この足を、二度と、信州へは向けねえぞ』

彼は再び、傷いたむ脚を鞭打つて、碓氷峠うすいを、東へ越えた。

砲や銃を積んだ牛車は、次の日の途中でも、西へ西へと、轍わだちを

軋^{きし}らせて行くのを見かけた。

土蔵から物置へ

一

騒がしい時勢の中に、月日の流れは、殊に早く思われた。

上方には大塩平八郎の乱がある。忘れやすい世間の脳裡から、それが消えると、沿海の諸国から、頻^{ひんぴん}々と、露艦を見た、英艦

がうろついている——などと黒船の飛報がはいる。

市井^{しせい}には又、高野長英だの、渡辺崋山だの、市民を戦慄^{せんりつ}させるに足る国禁事件が、降つてわく。

——でもまだ、日本は醒^さめていなかった。むしろ、江戸文化の終りに来ている頹^{たい}廢^{はい}的^{てき}な風は、吉原に、陰間茶屋^{かげまぢや}に、歌舞伎町に、役人の裏面に、町人の遊蕩に、鼠小僧の出没に——いろいろな社会層へ互^{わた}つて、腐^すえたる物の美しさと、醜^{けんらん}悪^さを彩る絢爛^{けんらん}さに、都会も酔い、人も囁^{たわごと}言^{こと}を云つて日を送つていた。

だが。

天保十一年、十二年となると、支那の鴉片戦争^{アヘンせんそう}のうわさは、海をこえて、日本の上にも拡がつて来た。

西洋文化を載せて——偽装した平和の侵略艦隊が、東洋を嗅ぎ歩いて、もう香港、上海まで襲せて来たのだ。

支那は、鴉片を売りつけられ、支那自身が、鴉片の害毒を知つて、その洋商を排斥し、その物貨を焼いたのが原因で、侵略艦隊を降りた紅毛兵は、平和の仮面をかなぐりすてて、長江を溯江し、南京城まで攻め上つた。

為に、支那は、香港を奪られ、上海を割かれた。

味をしめた利権占領軍は、南風を窺つて、次の獲物——日本の近海を、遊弋しつとあると、説く者がある。

海防の警鐘は、頻りと鳴つて、

（日本、準備せよ）

と、憂^{ゆう}国^{こく}の声^{こえ}は、しきりと伝わる。

だが、江戸は醒めない。

ここの民衆は、余りにも、幕府だけを知っていて、日本そのものの本来^{すがた}の相と、日本全体が見えなかった。

——そうした今年の江戸の夏。

山の手の四谷^{よつや}の一劃^{かく}は、屋敷町の閑^{かん}寂^{じゃく}な木立に、蟬しぐれが啼^なきぬいていた。

ただ此頃のこと、この界^{かい}限^{わい}に、炎天の真昼も、時には深夜でも、異様な音が、左門町の木の間から流れてくる。

カーン！

カーン！

冴^さえた鎚^{つち}の音であつた。

二

『窪^{くぼた}田先生。あれは、お宅ではないのか』

庄^{しょうない}内の酒井家の臣、加藤宅馬^{たくま}と松平舎人^{とねり}の二人が、ふと客

間の書院で、耳^{そばだ}を敬^そてて訊ねた。

主人の窪^{くぼた}田清音^{すがね}は、

『ム。あの鎚音でござるか』

と、微笑をうかべた。

『そうです。時節^{よろい}から、鎧^{よろい}でも打たせておいでなさるとみえる』

『刀鍛冶かたなかじじゃ』

『ほ。——御邸内に、刀鍛冶がおるとは御重宝ごちようほうな』

『そう、重宝でもない。見所みどころのある者故、物置小屋を直して、鍛冶小屋に与えてはおるが、若いし、容貌はよし、天才肌な男なので、女に好かれて困る』

『はははは。そう三拍子揃ったのも、厄介やっかいかも知れぬ。何と申す者で』

『信濃の産で、山浦内蔵助、環たまきともいい、刀銘には、そのほか正ま行さゆきなどとも彫ほつておるが』

『お手許に、作刀がござりましょう』

『ござる。見てやってください』

窪田清音は、立つて、床脇から、彼の鍛^うった一^{ひとつ}振を取ってそれへ差出した。

鍛^うちおろしの中身^{なかご}を一見して、二人は、交 《こもごも》に、驚嘆した。殊に、加藤宅馬は、鑑刀の眼もきくし、愛刀家といわれていたが、これは、古刀の名だたる銘作と比較しても、遜^{そんしよ}色^くのない物とまで——口を極めて賞めた。

『そうかなあ』

窪田清音は、にやにや笑った。

彼自身も、刀には眼利^{めきき}と、人にゆるされておりながら、そう云うのだった。そして、欣^{うれ}しそうな容子がつつめなかった。

『一体、こんな名刀が、どうして、お宅の物置小屋などに、埋れ

ているといつては失礼ですが、世間にも知られずに居るのですか』
二人は、数年前の、兵学の弟子だったが、今度の出府に、挨拶
に來たものだつた。

だが、今の一刀を見ると、もう他の話^{ほか}は忘れて、熱心に、膝^{ひざ}を
のり出した。

三

一片の紹介状を持つて、山浦内蔵助が、ここの門を叩いたのは、
もうすでに六、七年前になる。

（働いてみい）

窪田清音が、彼に与えた仕事は、ここの足輕奉公だった。

仲間ちゆうげん仕事を、二年やった。

（書生に取立ててつかわす）

次の一年は、玄関の取次番に坐り、朝夕、雑巾ぞうきんをつかんだ。

三年目に、初めて、

（何が希望のぞみだ）

と、訊いてくれたのである。

内蔵助は、抱負ほうふを話した。

（では、見せて遣わす物がある、尾ついて来い）

土蔵へ伴なわれた。

（毎日、ここへ籠って、当分、勉強いたすがいい）

と、清音は云った。

かたながもち

刀長持の中には、古今の銘刀が何十振とあつた。相州物、

備前物、肥前その他、彼がまだ接したことのない稀まれな名匠の作もあつた。

彼は毎日、土蔵の中で、その作品作風を見て、自己の工夫を凝こらした。そして今——初めて松代の長国寺内でやった自分の行為や言葉を、冷静に振ふり顧かえつて、

(若かつたなあ)

と、自分の未熟を、はつきり覚さとることができた。

そして計らずも江戸へ出て、良い恩師に就いたことを感謝した。旗本窪田助太郎は、お広敷番から弓矢奉公まで勤めた人だった。

清音すがねと人が称よぶのは、千蔭風ちかげの書をかいたり、和歌を詠んだり、国学に通じていたりするので、その方の名が、通称となつたものらしい。

講武所取立とりたての折、兵学の講義をうけ持ち、御留守番まで進んだが、もう身を退いて、閑役となつてゐる。年配は六十二、三。

——然し、がつきとした体質で、壮年から田宮流の剣道、無辺無極流の鎗術、中島流の火術——とみな一派の師となるほどな腕があつたという面影おもかげも今、偲しのばれる。

で、邸内には、講堂もある、道場もある。

内蔵助は、その文武二つの床に、この数年、いかに教えられて来たか、知れなかつた。

その上にも、今また、土蔵の中で、親しく巡り会ふことのできた——無数の古人の師。

（ああ、ここはおれの、大蔵経の経蔵だ）

彼は、自分の多幸に、思わずそう云つて、感謝した。

その間に、邸内の物置小屋を、少しばかり改築して、鞆をすえ、火土を築き、鍛冶道具も窪田清音が備えてくれた。

土蔵から、彼は、物置小屋へ移つた。

然し、彼の人間には、知識の光りと、技倆の上達が、清音の眼にも分るほど付いて来た。

『内蔵助、ちよつと参れ』

『お召ですか』

と、彼は、清音の前へ呼ばれて来た。

今し方、客の酒井家の家臣たちが歸つて、間もない後だった。

『近頃、夜は鍛^うたんようじやな』

『はい』

『邸^{やしき}にも居らぬ事がままある。どこへ参るのか』

『はい』

『近所の酒屋その他へ、だいぶ借財もあるとの事だが、何でそのように、金費^{づか}いが荒いのじや』

『はい』

『酒は好きか』

『好きです』

『酒だけにしては何うか』

『はい』

『貴様の瑕きずは、とかく、女子おなごとのうわさが絶えんことだ』

『心得ております』

『心得ながらなぜ自誠せぬ。まだ、これからという分際で』

『女子の方からうるさく付き纏まとうのです』

『だまれ。莫迦ばか』

『はい』

『——改めて、今日かように、そちの身持について申すのも、実は、其方^{いまし}に取つて、大事な機会が参つたからじやぞ』

と、誠^{いまし}めた後で、清音は、自分の吉事のように、次のような目^もくら企^{くろ}みがあることを、彼に告げた。

それは先刻^{さつき}歸つた客の——加藤宅馬、松平^{とねり}舎人の二人が発案で、物置小屋の隠れたる名工、山浦内蔵助を世に出すために、武器講という会を立てようというのであつた。

つまり山浦内蔵助作刀頒^{はんぷかい}布会なのである。口^{ふり}数を百口^{ふり}とし

て、酒井家は勿論、旗本仲間、各藩の有志に、刷^{すり}物を廻^{もの}して、

会員を募^つろう。額は一口三両とする、そしてその半額を前納して

もらい、やがて、内蔵助が本格的な鍛冶小屋を持つ資金としてお

いたなら、彼の将来には、刮かつ目するものがあるにちがいない。

これは、隠れたる天才を世に送り出すものだ。同時に、少額な金で、すばらしい新刀が手に入れば、時節がら、武士の腰にも、精彩が加わろう。——と、そういった趣旨の計画なのである。

『どうじゃな、貴様の心底しんていは』

清音は、彼の為に、又とない機会と、この企てを、欣んでいうのであった。

『結構です』

『結構だけでは心もとない。この企てには、責任があるぞ』

『やります』

『万一の儀があると、発起人、世話人など、連名していただく方

々のお顔に、泥を塗る事になるぞよ』

『はい』

『——と、まあ、わしの老婆心じや。然し、そちの技倆も、加藤殿のようなお目利めきぎが、認めて下さるように迄なつて、わしも共々欣ばしい』

『皆、御高恩による所でございます』

『何の、そちの天質と努力のいたす所。今日となつては、もうそれを世に問うて見るも早くはなからう。滅多にそこらのお天狗な刀鍛冶たちに負ひけはとるまい。この上とも、精進一途に、大を成すように心懸けい。それには、身も慎んでな。——よいか』

『……はい、はい。分りましてござります』

清音の愛は、師恩を超えていた。情誼^{じょうぎ}に感じやすい彼はすぐ涙になってしまふ。誓つていい刀を鍛つて酬^{むく}おうと思つた。酒も慎しみ、女も断ち、あらゆる慾望や誘惑にも打ち克つて——と、胸のうちで、繰返して念じた。

それから間もなく、「武器講百刀会」は生れた。彼は、その時から、優れたる劍工として、社会へ送り出された。

発起人には、窪田清音や知名の旗本や、酒井家の藩臣たちだの、巢立ちの一劍工にはむしろ過ぎた位な人々の名が連ねられた。

五

百口ふりの申込みは、瞬またたくまに、加入者で満たされてしまった。――同時に、物置小屋の鍛刀所では、何かにつけて不便なので、清音の屋敷から遠くない、四谷北伊賀町に一軒借りうけ、そこで、彼が江戸に於ける第一声の鎚つち音を、初めて、揚げることとなつた。

一刀、一刀、又一刀――と、彼の作品は、そこから生れて、百刀会の加入者たちに、籤くじ引の順で渡されて行つた。

その裏には、彼の凄まじい精進が、赫かつ々と溶鉄の炉ろに燃え、骨を削り血を吐くような苦心と研究が潜んでいた。

仕事場に立つて、鎚つちを把とればさながら鬼、深夜、土や焼刃の思念に瘦せ苦しむ影はまるで現な幽人であつた。そして、朝あしたに、自

己の会心の作を研ぎあげて、

しめた！

と、彼自身がさけぶ折などは、まったく神か、嬉々たる児童のような、歡びの姿だった。

——人は、そこまでの彼は見ない。

彼の作刀を見た者は、唯^{ただ}云った。

『これはすばらしい。国^{くにひろ}広、康^{やすつく}繼、虎^{こてつ}徹、水^{すいしん}心子、それから近頃の直胤——なんどにも劣らぬ作だ』

『いやいや、そんな新刀鍛冶の作^{さくぶり}振とは、懸け離れて、室町、

鎌倉期あたりの古人の名作へさえ迫るほどの所がある』

『何しても、格が高い、氣品がある。鉄^{かなあじ}味のよさ、刃作りの妙、

すがた

相の麗わしき、又この匂い。師匠譲りの、生やさしい技や口伝だけで、鍛てるものじゃない』

『新刀鍛冶は、みな墮落したといわれておるが、えらい鍛冶が出て来たものだな』

『近来の正宗まさむねだろう』

『ム。四谷正宗だ』

彗星すいせいのように現われた彼の名声は、ただ秘伝口伝や門流からの殻かにかくれて、偉そうな切銘と見てくれで無事泰平な鈍なまくら刀ばかり叩き馴れて来た無数の刀鍛冶たちへ、

——こいつは？

と、大きな狼狽と、衝動と、刺戟とを齎もたらした。

そこに又、彼に対する、嫉視^{しつし}、中傷の反動も挙がらずにいない。当時、江戸で巨匠といわれる鍛冶には、二代水心子正秀の一門があり、又、莊司箕兵衛直胤も松代から移つて、秋元侯^{あきもとこう}を背景に、下谷御徒町^{おかちまち}に、堂々たる門戸を張っていたが、そのほかの群小刀鍛冶に至つては、無数と云つていい程あつた。それ等がみな、一弦月懸^{げんか}かつて萬星滅す——四谷正宗の名声と共に光りを薄くしてしまつた。

然し、その名声を慕つて、四谷北伊賀町の彼の仕事場を訪ねて行つても、鎚音のしない日は、見つけ出せないほどそこは小^さかな家だつた。

又、彼の刀の切銘^{きりめい}は、従来、「信濃国正行」とか「山浦内蔵

助」とか又ただ「環」とか、その時々で切っていたが、やがて四谷に住んでから、

みなもとのきよまろ
源 清 磨

と、作品に切るようになった。

清の名乗^{なのり}は、勿論、恩師窪田清音^{すがね}の一字。一刀一刀鍛つごとに、鉄へ切り込む鑿^{たがね}のごとく、その人を忘れまいとする彼の気持から選んだ名であることはいふ迄もない。

そして、近頃、取った一弟子にも、清人^{きよひと}という名をつけてや
った。

木の葉雨

一

弟子は、他にも二、三名は取ったが、師匠清麿の烈しい精進に寄りつけないで、よく出たり這入ったりしていたが、清人だけは離れなかった。

清人は仙台生れで、出羽某^{でわのなにがし}とかいう田舎鍛冶に就て、修業の下地はあつたし、鈍な代りに、正直で朴訥^{ぼくとつ}だった。清麿も、仕事ではよく怒りもするが、特別、可愛がつていた。

『師匠』

と、その清人が、或る日云う。

『なんだ、いやに改まって』

『お願いがあるんです』

『おれに？』

『へい。……他^{ほか}じゃありませんが』

『何をもしもじして居るのだ。どうも汝^{てめえ}は煮え切らねえ男だ。刀

鍛冶が、そんな鈍じゃあ駄目だ。もつと、すつぱりと、齒切れをよくしろよ、齒切れを』

『じゃあ云います。……云い難^{にく}い事なんですが、今朝、師匠が井戸端で、顔をお洗いになった後、ひよいと流して見ると、師匠の

吐いた痰たんつば唾の中に、赤いものが交まじっていました』

『……ム。血だろう』

『じゃあ、御自分でも、知っているんですか』

『いちど、もつとひどく、血を吐いたこともあるから』

『何で、それを打うちつ捨すておくんです。実あ私は、ずっと前から、

お次さんに注意されて、気をつけて見ていたんですが……此頃は、殊に師匠のお体が瘦やせて来るし——心配で堪たまりません』

『お次が……そう云っていたのか』

『どうか、御意見をしてくれと、お次さんから頼まれたし……私もそう思うんで、叱られるのを覚悟で申します。——どうか師匠、余り仕事で無理をしないで下さい。それと、お酒を……もう少し

減らして飲むわけにはゆかないでしようか』

清麿は、黙って、俯向いたまま、聞いていた。云われないでも、胸の痩せ、膝の痩せ、病魔に蝕むしばまれている体は、自分の手で撫でもわかる。

百刀会の百口ふり鍛ち上げにかかると共に、一時は杯さかずきを捨ててもみたが、鬼となつて、仕事へ打ち込む情熱は、酒へもつい燃えつき易く、一唇くち触れれば、ままよとなつて、一升二升、暮れても明けても、分らない彼の酒だった。

それが、病びようく軀けずを削けずつてゆく――

清麿は、知らないではない。

だが、人には云えない、心の内には、人間の誰にもある苦悶の

巢がある。——故郷の事ども、其後の母の死、残して来た妻や子や、兄真雄さねおの境遇にも。

『……………』

沈ちんめん漣と、今、弟子の前に俯向うつむいている清麿の青白い面おもてには、それがありありと刻まれていた。

いつか、十年はあれから過ぎた。その後、故郷くにに起った禍も皆、自分が残して来た禍根かこんのように責められるのだった。長国寺の事以来、藩老の矢沢監物から睨まれて、恩人柘植嘉兵衛の失脚——兄真雄へのさまざまな迫害——妻のお咲や梅作の身にも、前の養子先の縁者たちを繞めぐつて、種々いろいろうるさい事情や拘束も起つていと風の便りに聞いている——。

その上に、数年前、自分の居所もまだこつちから知らせぬ間に、母のお菅^{すげ}も死んだとある。柘植嘉兵衛の消息も知れない。

四谷正宗の、又、清麿は名人のと、人はいう。空^{くう}な名声は晴れがましく云う。

——だが、誰に今、その一剣を捧げよう。

『清人、よく云ってくれた、これから気をつける。だがな、酒だけは、たんと飲^やらないようにするが、少しは、ゆるしてくれ。愚な師匠と、笑うだろうが、見ないふりをしていてくれ』

裏は藪やぶで、椿の木が多い。木立ちの向うに寺の寺内が見える。

この界隈かいわいの屋敷といえば、伊賀者衆の組屋敷だった。

お次はよく、その露地を、人目忍んで来る。清麿の家は、破れ垣に囲まれていた。ここも、伊賀者衆が住んでいた古家の跡かも知れなかった。木戸を開けると、空地のように、荒れた庭と鍛冶小屋が東の片隅に見えた。

そつと、台所を覗のぞいて、

『清人さん、いますか』

小声でいう。

『あ、お次さんか。きのう持って来た小鰯こあじは美味うまかったぜ。師匠も美味しいといっていた』

『じゃあ、清磨さんも、喰べてくれましたか。……今日は、お洗濯物が乾いたから、^{ほころ}綻びを縫^ぬって持って来ました』

『毎度、すまないなあ。お次さんが居てくれるので、まったく、助かるというものだ』

『お師匠様は』

『ぶらつと——出て行つたが、伝馬町の表通りで、^あ会わなかったかい』

『いいえ』

『手紙を書いていたから、飛脚屋へ行つて、故郷^{いなか}へ金を送りに行つたのかもしれない。そんな用事だけは、自分でそつと出かけるから』

『お故郷こくにには、残して来たお内儀様と、お小さいのがおひとり居るんですってね』

『おれには、何も話さない。飲まないと、無口な師匠だからなあ』
『この頃、お酒は……』

『やまないよ、あれだけは』

『お体が丈夫ならいいけれど……。それが心配でたまりません』
『酒も酒だが、仕事もいけないなあ。あたり前にやっていれやあ
いいけれど、師匠のは、一本の刀が鍛うち上がるたび、一本の骨を
削って行くようなものだ』

『百刀会の刀は、もう皆さんに渡ったんですか』

『どうして、もう二年にもなるが、まだ何本も仕上げちや居ない。』

金は要るから、あらかた取つて費^{つか}つちまつたらしいが、どうするんだろ、いったい』

『他の刀鍛冶のように、手伝いでも入れて、早く仕上げて、次のお仕事をなさればいいのに』

『それが出来ない師匠なんだよ。あれじゃ一本、百両取つても、合やあしない』

『……つい、お喋^{しゃべ}舌りしてしまった。お師匠様のいないうちに、お部屋の掃除をしておいてあげよう』

彼女が此家^{ここ}へ来るたびに、家の中から、無^ぶ性^{しょう}な埃りが払われた。

お次は、窪田清音の屋敷にいた小間使であつた。まだ、清麿が

そこにいた頃、ちらと、男女にうわさが立つとすぐ、苦勞人の清音は、穏やかに、彼女を家元へ歸してしまつたものである。

——だが、便りはそつと、つづけて居たらしい。清麿が家を持つと、彼女は、叔父の家から、足しげく、北伊賀町へ姿を見せた。二十一、二の年ごろで、下町育ちの齒ぎれと、情操じようそうと才とが、清麿の氣もちにぴつたり合つた。然し彼は、窪田清音の誠いまましめがあつたばかりでなく、血を吐く胸の病びようそう竈そうを自覺してから、触れてならない花のように見ていた。そして、それを冒おかしかける自分の心を、時には惧おそれた。

晩秋となると、この界隈の屋根も廂も、木の葉の雨だ。

今朝も彼は血を見た。——唇からである。

『ゆうべの酒が祟った……』

と、思う。そして慚愧にたえぬ面を井戸に洗う。

鍛冶小屋に霜が白かった。

清人が、朝早くから、一人でコチコチ仕事している。彼自身の作にかかっているのだ。

『どうだ、銘刀が出来そうか』

『あ……お眼ざめで』

『いい、いい、おれの事はいいい。今度の仕事は、お前の腕が初め

て世間で試めされる大事な一本だ。慥しつかり乎、鍛てよ』

『師匠のようには参りませんが、師匠の一心不乱だけは、学んでやる覚悟です』

正直者だけに、清人は、唇を噛みしめて、その一生懸命な意気を、顔つきに描いて見せた。

それは、首斬り役の山田浅右衛門から来た註文なのである。清磨に——という依頼であつたが、

（刑場で使う刀は鍛たない）

と、あつさり断つたので、ならば、お弟子の内でもというので、清人を世に出してやる為に、引請けたものだった。

首斬浅右衛門が、誰の作は斬れる、と折紙つけければ、剣工とし

て、一人前の札がつく。——慥乎しつかり、鍛てよ、と彼が激励したのは、正直で鈍重なこの一弟子に、はやく一人で飯の喰えるだけの力をつけてやりたいと常々念じていたからであつた。

『ちよつと、出かけるぞ』

『あ。お出かけですか』

『ム……ちよつと』

そのくせ、清磨自身は、もうここ一月の余も、鍛冶小屋に坐らなかつた。

鍛てないのだ。心がそこに向かないのである。

『喰う為という目的めあてだけで、あれ程、仕事に夢中になれる人間は

仕合わせだなあ』

外へ出てから^{つぶや}呟いた。そして、仕事の熱を求めるように、

（誰の為に、おれは鍛とう）

と、心で思つた。

飯の為、酒の為、ただ生きる為だけで——彼は刀は鍛てなかつた。なぜならば、彼が刀を鍛つ仕事は、自分で生命を削るのも同じだと——それが分つて居るからである。

（母が生きていたら……）

と、その度に思う。思つても効^かかない事と知りながら胸が傷む。そして、空虚^{うつろ}な心は、酒の魅惑へ、つい囚われた。

——その日も、夜まで飲み歩いて、殆ど、性もなく、木枯らしの中を落葉と一緒に飄^{ひょうひょう}々と吹かれながら、平河天神から麴^{こうじ}町

の灯ひをあてに來ると、

『やいつ、田舎鍛冶いなかつ』

『勞咳ろうがい病み。待てつ』

誰か分らないが五、六名はいた。——挨拶がないとか、生意氣だとか、悪口を喚きながら、清磨を、袋叩きと集つて來たのである。獲物の棒切れか何かが、二つ三つ、清磨の瘦せた背骨や、腰に中あたつた。

不意ではあるし、泥酔していたので、清磨は、大勢の中へ仆れた。——然し、仰向けざまに蹠よろけながら抜打ちに薙ないだ刀に、手応えはあつた。次の瞬間、意気地なく、わっと大勢が退いたので、その背の一つへ、追い打ちに、もう一太刀、浴びせかけたのも覺

えている。

わらわらと逃げて行つた^{あしおと}跫音の後には、又、ひっそりと静かになつた。坂の途中の閉まつている屋敷門の下で、彼は、その儘、血刀を持つた儘、いい気もちで、眠つてしまつた。

血臭いので、暫くすると、犬が吠えかかつた。それに、眼をさまして、彼は又歩き出したが、寒さにだいぶ酔いも醒めかけていた。坂の上まで来ると、^{よたかそば}夜鷹蕎麦の灯が見える。よろよろと屋台の中へ首を入れた。

『おいつ、蕎麦』

『へい』

『——じゃあなかつた。まず先に、一本かな』

『旦那』

『なんだ』

『血がついて居ますぜ、お手に』

『ほう、成程。……手桶に水はねえか』

『御座いますか……はてな？』

『何が、はてなだ？』

凝^{じっ}と、蕎麦屋は、顔を見ている。清麿も何気なく蕎麦^{うり}売の顔を見つめた。

見たような男なのだ。

先でも、いつ迄も眼を耀^{かがや}かしていた。

四

『ウム。思い出した。——もしや旦那は、信州の山浦という刀鍛冶の弟じゃないかな』

『お。……蕎麦屋さん、お前とは、松代で会った事があるな』
『ある』

『長州の浪士と云ったか、藩士と云ったか、忘れたが、たしか名は金子重輔』
じゅうすけ

『よく、覚えている。いかにも、自分は金子重輔だが。……おぬしは、江戸へ出ていたのか』

『夜蕎麦売とは、変った渡世とせをしているな。おれも、彼のあ日が、

生涯の岐れ道^{わか}になつて、とうとう、つまらない刀鍛冶に成つてゐる』

『そうか。して刀の切銘^{きりめい}は』

『山浦清磨^{きよまろ}』

『えつ、近頃、四谷正宗といわれる清磨とは、おぬしのことか』
『面目ない。そんな大したもんじゃねえ。……ああ、あんまり意外な人に出会つたので、酒がさめちまつた』

『飲もう！ ……。こつちへ這入らないか。火もあるぞ』

『お前さん、まだ、本職の蕎麦売じゃないな』

『元より、これは仮の姿だ』

『ふうム……。この寒空に、粹^{すいきよう}狂^{きやう}な、何でこんな真似をして

いるんだ』

『粹狂？ ……そう見えるか。江戸の人間には、そうも見えようなあ。おぬしのように、明日の日本が、何^どうなるかも知らず、飲んで、囃^{たわ}言吐^{ことほ}ぎいて、虫けらみたいに、生きている奴が大概だから』

『何。 ……何だと』

『まあ飲め』

屋台の裏で、空箱を腰掛けに、行火^{あんか}を挟んで二人は対^{むか}い合つていたが、清麿は、重輔の今の一言に、さつと、冴えた顔から、鋭い眼をすえた。

五

彼が怒ったので、金子重輔は、

『では、虫虻むしけらと云った理わけを聞かしてやろう』

と、肱ひじを張って云った。

今、日本は、開闢かいびやく以来の危機にかかっている。

海の外を見る。支那を見る。

英、仏、露、など諸外国の虎視眈眈こしたんたんと日本の隙間を窺うかがっている

ことを考えてみたら慄然りっぜんとしようが。

だのに、江戸はこの頽廢たいはいぶりだ。幕府は無能だ。——誰が、

神国のこの危機を救うか。われわれはもう、腐すえた幕府などとはと

うに見捨てている。

この時、これは神示だ。

われわれが、仰ぎまいらす御方は、一天の大君しかない。だのに、その御所の御衰微ごすいびの様といったら何どうか。

口にするのも勿体ない、涙がこぼれて云えない。

『……貴様、知っておるか』

金子重輔は、涕てい涙なみだして暫く、口を緘つぐんでしまった。

彼は又、熱心に言葉をつづけ、日本の国体から説き起して、二千余年の治乱を語り、幕府の悪政による朝廷の御式微がどんなに下々の想像もつかない程であるかを話して、

『ただ、幸には、幕府は腐っても、この国体はまだ腐っていないか

った。今のうちに、尊王そんのうの大義を建て、外夷を討つ計を立てなかつたら、この日本は、支那と同じ轍てつをふむほかない。——日本に生れながら日本を知らず、醉生夢死に世を送ってしまう奴らを、虫虻と云ったのは、おれの間違いだろうか』

と、一気に云い終つて、清磨の顔を見つめた。

『……………』

清磨は、身を凍こおらせて、凝じつと、聞き澄ましていた。唇の色まで霜風しもかぜにふかれて蒼あおかった。——然し、彼の性来多感の血は、少年のように、皮膚の下に沸たぎり立っていた。

『ありがとう』

慇懃いんぎんに、頭を下げ、礼をいうと、重輔はかえつて、揶揄やゆさ

れたかと思つて、

『何だ、それは』

『慎んで、お礼を云います。もし今夜、貴方に会わなかったら、

私は、虫けらで生涯を終つたかも知れなかつた』

『才……解つてくれたのか』

『解らずに何うしましょう、胆きもにこたえました。——同時に、劍

工として、自分がこれから鍛える心のまと的もつきましたが、まだ一つ、疑いがある』

『疑い？……それはわしの云つた事にか』

『いや、自分の仕事に就て』

『どういう事か』

『時勢は、移つてゆく。武器もどしどし進んでゆく。兵術も洋式になる。——そうした世の中では三尺に足りない刀など、今に、進歩した砲術の前では、針ほどな役にも立たなくなるのではないでしようか』

『……ウウム』と、重輔も、それは深く考え込んで居たが、やが聴て、『そうだ、それは佐久間象山先生に聞け。象山先生のほかに、その答を明確に云つてくれる人はあるまい』

『あいにくと、てまえはまだ、信州へは行かれません』

『何、松代まで行く必要はない。先年から藩公に従ついて、象山先生は江戸へ出ていらつしやる』

『えっ、江戸に御在府でございますか』

『内密だが、自分も密ひそかに、出入しておるから、日を見て、一度先生のお宅で会おう。猶なお、いろいろと話しもあるから』
と、他日を約して、その夜は別れた。

火華氷柱

一

西洋真伝兵学砲術教授所

表門に、看板が掛けてあつた。

木挽町五丁目^{こびき}の佐久間象山の江戸屋敷である。約束の日に、清

麿はそこへ行つた。

金子重輔は、先に來ていた。その日は、いつか見た姿とは變つて、どこから見ても志士らしい侍の服装になつていた。

『十数年前、信州の小島村で、お目にかかった山浦清麿でございます』

彼の挨拶を聞くまでもなく、重輔から話を聞いていたので、象山は、

『よく來たのう』

と、當時を追懷^{ついかい}して、今の刀匠清麿^{なつか}を懷しげに見た。

そして、清麿から、例の疑いを、問い出さないうちに、象山から云った。

『——聞けばそちは、将来、西洋兵術や砲術が進めば進むほど、日本刀は不要になりはせぬかという迷いを抱いているそうだが、余人の凡工ぼんこうなら知らず、山浦清麿ともある者が、そんなことでは困る』

と、前提して、

『剣けんは、武士のたましいだ。武士は国体の衛士えじだ。この国土のある限り武士道はある。武士のある限り、武士のたましいたる剣もなくてはならぬ。——わけでも日本刀は、洋刀とは違う。それを鍛つ者の精神、それを帯びる者の精神、二つながら違う。もし、

その精神が錆びたり、その精神が失われるようなことがあつたら、日本は亡ぶ日だ。——だから日本の亡ぶ日まで、日本刀は朽ちさせではならぬ。不要になるなどとは、以てのほかな夢想で、鍛てもつと、その信念を以って鍛て』

西洋学者といわれた象山の口からそう云われたのである。清磨は、もう迷わなかつた。

（剣工！ ああ、よくもおれは、この天職を掴み取つた。そうだ、日本の剣工でなければいけない）

ここへ、来る前の彼と、帰つてゆく時の彼とは、姿は同じでも、既にちがつていた。

礼をのべて、帰る際に、象山へ、

『お座^{ざう}右へ置くには足りませぬが、いずれ^{ひとふり}一口、その心をもつて鍛^くつたものを持つて参りまする』

と約して別れた。

二

——その戻^もり道。

木挽^{こびき}橋^{はし}の上で、ちらと、摺^すれちがった年増^{としま}の茶屋女風の女が、

『——あらっ？』

と、往来の人の間から、軽い驚き声を投げた。

振^{ふり}顧^{かえ}つて、清麿はハツとした。別所で別れたお寿^す々^ずだった。

橋向うまで馳けて、その辻つじ駕かへ飛び乗った。

行く先も云わずに乗ったので、駕屋かごやは、

『旦那、急げ急げって、何処まで行くんです』

『柳橋辺りでいい』

つい、云ってしまった。

いつも飲む家の門かどである。——どう自分の天職に自覚を持つて

も、酒だけは、だめだと思った。酒とは、終生、縁が切れそうな自信もない。

『ああ、何日いつか会うものだなあ』

お寿々を頭に描きながら、その日の帰りも、深酔いして、家へ戻ると、夕闇の暈の上へ、ごろりと転うたた寝ねをしてしまった。

と、勝手の方で、

『清人さん。きよひと……たいへんです、ちよつと来て』

お次の声がした。

清人は、仕事場から出て行つた。

『なんだ、大変て』

『左門町に、固山宗次かたやまむねつぐという、弟子の沢山いる刀鍛冶がいる

でしよう』

『篋棒べらぼうめ、弟子が大勢居たつて、宗次の刀なんぞ、なまくらばんづ鈍刀番

附けの横綱だ』

『そんなことを告げに来たんじやありません。その宗次の弟子が、どこ何処かで、家のお師匠様に、斬られたことがあるんですつてね』

『へエ。……聞かねえが』

『その事だの、遠い前の事だの、種々いろいろと、遺恨いこんが積っているから、清麿のやつを斬ってしまったわけじゃない。今夜は斬り込むのだと、ゴロ浪人まで入れて、刈豆店かりめだなの居酒屋で飲んで居ますとき。いつもここへ来る時、買物に寄る、煮豆屋のおかみさんが教えてくれたんです。……清人さん、お師匠様は』

『うたた寝していら』

『まあ……。何うしましょう』

『何うしよう』

と、清人と一緒に顫ふるへ上つて、そつと、清麿の寝顔をのぞきに
来た。

清麿は、眼をあいていた。そして、清人から聞かないうちに、
『抛^ほつとけ抛つとけ。だが、いくら蚊みたいな奴でも、沢山来ち
やあ、うるさいから、玄関の両側に、薪^{まき}をうんと積んで、蚊いぶ
しの代りに焚火^{たきび}をしておけ。——いいか、そして門の戸も、裏の
木戸も、残らず開けっ放しにしておくんだ』

『師匠……。お酔いになつてゐるんでしよう』

『ばか。酔つてゐるか居ないか、これを見ろ』

抱いて寝ていた自分の一刀を、寝たまま抜いて、ぱつと夕闇を
横に薙^ないだ。

『——あッ、あぶないっ』

清人は、台所へ飛んで来た。

お次は、御家人ごけにんの娘だけに、そう聞くと、

『仰おほつしやるように、して置きましょう』

と、家の中も、表も裏も、皆開け放して、二、三カ所に、大袈げ裟さな焚火をしておいた。

『どうなるんだろ?』

と、清人は、生きた心地もない。むしろ落着いているお次を力に、息をころして隠れていた。

やがて、固かた山宗次やまの弟子やゴロ浪人は、獲物を持って、襲よせ

て来たが、がらん——と開け放してある家の中と、どこどこ燃えさか旺わっている火を見ると、

『……おやつ?』

『はてな？』

立ち竦^{すく}んで、垣の外を、やや暫く、こそこそしていたが、そのうちに町廻りが来たので、わっと逃げ散ってしまった。

三

清人は、飛び出して、手を打った。

『わははは。ざまあ見やがれ。師匠、もう逃げちいましたぜ』
お次は、手桶の水を、火にかけて消していた。

むっくり起き上って、清麿は、

『折角、今夜は夜半^{よなか}から、仕事にかかろうと寝ているのに、うる

せえ奴だな』

『師匠、今、燈火あかりをつけて持つて来ますが、ひとつ鑑みて戴いたかれま
しょうか』

『なんだ、鑑てくれとは』

『お蔭様で、山田浅右衛門から註文された刀が、やっと仕上りま
したんで』

『ほう……』と、ニツコリして、

『出来たか。どれ見せろ』

清麿が欣んでくれたので、清人は、行燈を片手に、白鞘に仕立
てたばかりの一口ひとつりを持つて来て、差出した。

清麿は、鞘を払って、凝じっと、眉をよせていたが、ずかっと起ち

上るなり、

『だめだ。こんな物！』

しきいすき

闕の隙に突っ込んで、ヘシ曲げてしまうと、がらりと、庭先へ投げ捨ててしまった。

『あつ……師匠っ』

清人が、泣き声を出すと、

『何だ、惜おしそうに。あんな物なら鍛くわ冶かじでも鍛つ。小手先でもヘシ曲がるような飴細工あめを、清麿の弟子の刀といわれては、おれの名折れだ』

『……へ。……へい。……済みません』

『刀とは、こうして作るものだ。仕事場へ来いっ』

もう、そう云った時の顔つきから、清磨の面には、おもてここ久しく
 出なかつた、仕事への凄まじい情熱——あの夜叉やしやにも似た血相が
 漲みなぎつていた。

四

その夜から師も、弟子も、かわや厠にゆく時のほかは、鍛冶小屋を離
 れなかつた。

夜半も、ふいごうな鞆が唸り、かなしき鉄敷の響きが洩れ、冬の月へ、凍いて返つ
 た。

幾日も、幾夜もつづいた。

帰るにも帰られず——お次は母屋おもやにいて、そこへ、握り飯を運んだり、表へ来る借金取りの云い訳に、手をつけていたりした。

『もしえ？ ……ちよつと伺いますが』

と、小粋こいきな中年増が、門を覗のぞいて云った。

『こちらは、山浦清磨さんのお住居すまいですつてね』

『ええ、そうです』

『あなたは、御新造さんですかえ？』

女の眼は、妙に鋭く燃えているので、お次はすこし脅おびえながら、

『いいえ……』と、答えると、

『ホホホ。そうでしょうねえ。此の家に、他ほかに御新造様などが
いてたまるもんじやないからね。どこに居るんです環たまきさんは』

『環さん？ ……そんなお方は』

『いえさ、今の清麿さんの昔名前さ。わたしやあ、あの人に、用があるんです。ちよつと、そう云つて下さいよ』

『今は、お取次ぎができません』

『どうしてさ』

『叱られます』

『いいから、そう云つてお出でなさい。別所のお寿々べっしよすずが来ましたといえ、何を打ツちやつても、飛んで出て来なけれやあならない義理合いがあるんだから』

『……でも、それは、御無理でございましょう。会わないと仰つしやっている時は、誰方どなたが、何といおうが』

『会わせないというのかえ。——あ、あれは、鍛冶小屋の音だね。お前さんなんぞの取次ぎは待たないからいい。自分で勝手に会つて来るよ』

家の横へ廻つて、裏へ行こうとするので、

『あつ、いけません。——もしつ』

お次が、裸足^{はだし}で飛び降りて、彼女の前を遮^{さへぎ}つた。

『なにさ？ 出洒張^{でしゃば}つて』

お寿々は、お次を突き飛ばして、小走りに駆け込んで行つた。

見ると、露地^{ろじ}つづきの裏のすぐ彼方^{むこう}に、注連縄^{しめなわ}の張り廻してある黒い鍛冶小屋の入口がすぐあつた。

仕事の権化となつてゐる清磨には、彼女が、小屋へ這入つて来

たのも知らずにいた。お寿々は彼の姿をそこに見ると、くわつと
して、いきなり、

『お前さん！……よくもわたしを、お忘れだね。いえさ。よ
くも、私の姿を見ながら、何日か木挽橋では、逃げましたね』
と、清磨の胸ぐらをつかんだ。

清磨は、驚くよりも、猶、仕事のうつつから醒めないで、

『え。……誰だ。おまえは』

『誰とは何さ』

甲^{かん}だかく、お寿々は、泣き声をふくんで呶^ど鳴^なった。

『シラを切るのもいい程におし。別所のお寿々を忘れて、お前さ
んは済むのかえ』

『あ……おう……お寿々か』

『さ！ 話があるから、出ておいで』

『うるさいっ』

『何だって！』

『何もくそもない。注連縄が見えないかつ。ここは山浦清麿の鍛冶小屋だぞ』

『知ってるから来たんだよ。もうお前なんぞに、未練はないが、く、く、くやくくつて堪らないから』

『出ろっ、出てゆけ。不浄だ。小屋が穢けがれる』

『穢れるだって。よくもそんな口が』

『ええいつ、出ないか。撲なぐるぞっ』

『若い娘なぞ、引ッ張りこんで、私を、不浄なんて、口惜しい、離すものか……』

『うぬ、出て失せぬか』

『出て行つて、たまるものか』

『よしっ』

清麿は、力まかせに、突き出した。それでもまだ、お寿々は、躍氣^{やつき}とかかつて来るので、小脇に引ッ抱えると、裏木戸から、寺の寺内へ抛り出した。

『清人！ 小屋を一度掃き出して、塩を塩をつ』

自分の鍛^うつ劍に、自分が抱いた新しい信念を吹きこんで、その一口^{ひとふり}を、彼はまず、佐久間象山へ贈ろうと、発心したのであった。

彼は、その一刀を。

又、弟子の清人は、鍛^{ひとこし}ち直しの一腰を。

師弟二人が、共に、対^{むか}い合つて、あだかも鍛^{むか}ち競べをするかの

ように、不眠不休といつてもいい精進を、十数日もつづけていた。

ふと、対い合っている弟子の鑢^{やすり}の音が止むと、

『清人ッ』

『……はア』

『眠いのかっ』

『い、いえ』

『なんだその眼は。てめえの作る刀の未来も分るぞ、眼からして、もう赤鰯だ。——水を浴びて来いっ』

『へいっ』

清人は、深夜の井戸端へ駈け出して、氷の棘が生えている釣瓶縄を見ながら、真ッ裸になるのだった。

『おれも浴びる』

と、清磨も来て、仕事着をかなぐり捨てた。

肋骨の出ている細い肉体に、冬の風がふきつけた。清人は、吃び驚して、

『師匠、と、とんでもない。……滅茶だ、そんなお体で』

『ばかあ云え。おれの体には、注連縄が張つてある』

『後生です……止めておくんなさい。神様へ向つてなさる行な

らば私が、師匠の分も浴びておきますから』

『心配するな。実あ、てめえを叱りながら、おれも眠氣に襲われて来たのだ』

笑つて、彼も一緒に、釣瓶の水をざつと浴びた。

鑢かけして、相造りが終ると、焼入れにかかった。弟子に

教えることは懇切だった。だが、清人は清人だけの才分しかな

かった。何か、氣に触れた時である。清麿は、彼の脳天から、雷

鳴のように呶鳴った。

『止めちまえッ！ 刀鍛冶はッ』

そして、いきなり蹴飛ばして、研桶とおけの水を頭からぶツかけた。

外へ、転ころがり出した上、研とぐその水に、濡れ鼠になった清人は、もうほんとに、刀鍛冶は止めてしまおうと思つたのか——冬陽びの日向ひなたへ立つて、男泣きに泣いていた。

張板はりいたを立てて、檻ぼろを洗い張りしていたお次は、気の毒そうに、そつと寄つて。

『どうしたの……どうなすつたの……』

『かまわないでくれ。……おらあ、唯、自分が鈍に生れたのが恨めしい』

『又、叱られたんでしよう。ここが、慄こらえどころですよ。何どんな

職業しごとだって、修業の道は辛いものと極っています』

その時、玄関の方で、

『頼もう。——山田浅右衛門の使の者でござるが』

と、厳いめしい口かのきき方をした使者の訪れが聞えて来た。

催促である。

お次が、出て行つて、聞くと、

『註文の刀は、ぜひ年内に欲しいのでござる。——という次第は、鍛ち下ろしを戴いた翌日——いつも朝の未明みめいでござるが、罪人の死体をお上より申しうけ、新刀あらみだめ試しをいたしておきたいと主人が仰おほつしやる。——それには、初春はるにかかつては、何かと、困り申すので』

口上は、裏の方まで、よく聞えて来た。

清人は、威勢よく、涙の顔をこすつて、仕事場へ這入つて行つた。

『師匠。……すみません。これから、自分の愚鈍へも鑢やすりをかけて、猶なお、一生懸命にやりますから、どうか、もつと叱つて下さいまし』

六

年暮くれに押迫つた極月の二十七日頃。

小塚つ原は、霜しもばしら柱で真つ白だった。然し、空は暗く、夜は

まだ、明けるにだいぶ間まがあつた。

千住の宿場遊廓しゆくばぐるわから飛んで来た帰りかご駕の提灯かんばんらしいのが、

どう道を勘ちがいしたか、刑場の原へぶらぶら迷いこんで来る様子——

『おや、馬鹿野郎め、狐にでも化かされやがつたんじやねえか』
番小屋にいた非人の二人が、のそのそ出て行つてみると、空から駕
はすぐ町の方へ引つ返して、後の原っぱに、酒くさい男が一人、
ぼんやり立っていた。

『御浪人、ここは通り道じやねえぞ』

教えてやると、素すあわせ給一枚の痩せた男は、知っている——と領うなず

いて、小判を一枚、懐ふところ中から出し、

『少いが、これは手土産てみやげだ。その代りに頼みがある。明日あしたの早朝、

ここで山田浅右衛門が、どうだめ胴試しにかけける罪人の死骸を、朝までおれに貸してくれないか』

と、云うのである。非人は、不審顔して、

『いたずら悪戯されちやあ困るが』

と、金も欲しそうな顔すると、

『はははは。悪いたずら戯するどこか、抱いて寝るだけのことだ』

——こいつは、酔っぱらっている。非人は顔を見合せてくすくす笑った。金を取って置かなければ損と当然に考えた。

『そのむしろこや筵小屋の中に入っている死骸がそうだ。外へ持ち出しちやいけねえぞ』

指さすと、酔いどれ浪人は、這い込んで行つた。非人は、腹を

抱えて笑った。程経てから又、そつと外から覗き込んで、

『あれ……ほんとに、死骸を抱いて寝ちまやがったぞ。酒くせの悪いやつもあるものだな』

と、呆れ顔を見あわせた。

一方は、

『起せ起せ』と、云つたが、

『まだ、空は暗い。浅右衛門様のお駕が見えてから、^{つま}抓み出しやあいいだろう。一両の宿賃だ。もうちつと、寝かしておいてやれ』と、放つておいた。

辺りが白みかけると、山田浅右衛門と二、三名が来て、^{かた}形の如く、死骸を土壇^{どたん}にすえた。ゆうべの酔っぱらい浪人は、いつのま

にか、消えていた。浅右衛門は自身、鍛^うち下ろしたばかりの新刀——清麿の弟子斎藤清人が鍛えた一口^{ひとつり}を試して、

『存外、斬れる』

と、評しながら、間もなく帰って行つた。

正月の二日早々。

清人の所へ、山田浅右衛門の宅から、斬^{きれ}味^{あじ}を賞揚した礼状一通と、酒肴^{しゅこうだい}代^{だい}とが届いた。

清人は、その手紙を持って、年始に歩いた。何処へ行つても、それが自慢だった。——ところがそれから一月も経ってから、彼は、お次^{ささや}から囁^{ささや}かれた。

『清人さん、あまり自慢し散らさない方がよう御座いますよ。お

師匠様のお情も知らないで』

なさけ

『ばかいえ。あの刀は、鋼卸はがねおろしから研ぎ上とあげまで、おれの手で

鍛えたのだ』

『それはそうでしょうが、浅右衛門の手にかかって、斬れ味のよかつた理わけを知っていますか』

『おれの腕が確かだからよ』

『そうではないでしょう。極月の二十七日の晩、お師匠様はお留守でしたろ』

『遊びに出かけて、翌日の昼間、頭の重い顔して、帰っておいでなすつた。酒のことは、いくら云つても無駄だから、もう御意見は云わない事にした』

『何を云っているんです。……あの晩、お師匠様は、清人さんの刀が見事斬れるか斬れないか、それを心配する余り、家へ帰らなかったんですよ』

『えっ、神信心にでも行つて下すつたのか』

『いいえ。お帰りになつてから、私が、着物をたた畳んで上げると、

何ともいえない嫌な匂いがするので——オヤ、死人しびと臭い——と迂うつかり云つたら、お師匠様が、きつと私を見て、黙っている、と恐い眼をしてこう仰つしやつたんですよ』

『ど、どう云つたんだ』

『——浅右衛門の胴試しに会つて、もし、清人の刀が、斬れなかつたら、あいつの一生涯は、浮かばれない事になるから、小塚つ

原の非人に金をくれて、試しにかける死骸を借り、明け方まで抱いて寝て、死骸の肌を温めておいたんですって』

『……えっ、師匠が、死骸を抱いて寝たんだって』

『わたしは、初めて聞きましたが、凍っている死骸を斬るのと、人肌に温^{ぬく}もっている死骸を斬るのでは、まるで斬れ味がちがうんですってね』

『……………』

清人は涙もろい。お次からそう聞くうちに、もう両腕に顔を埋めて、彼女の方へ背中を向け、しゃくり上げて泣いているのだった。

『……まあ、又泣いてしまつて。清人さん、お師匠様の心が分つ

たら、泣かないでも、それを、胆に銘じておいて、いつか御恩返しをすればいいじゃありませんか。……お師匠様も、きようは、去年からかかつて、一心に鍛ち上げたお刀を持って、佐久間先生とやらのお屋敷へお出かけだし……さ、泣かないでよ。ね、清人さん、^{うぐいす}鶯が笑っています』

裏庭の梅花はもう^{うめ}綻びかけていた。

不滅の国^{くにたま}瓊

一

長州訛なまりの侍、薩摩弁の侍、柳河藩なにかしの某、莊内藩の誰——と、木挽町の西洋学者の門を出入する志士風の者はかなり頻ひんぱん繁であつた。

清麿も、その一人だつた。

彼が贈つた一作は、いつも、象山の座右に置かれていた。

そこで、幾多の志士と、清麿は知り合つた。若い志士たちの理想や議論をだまつて聞いていた。

——が、彼は同時に、世間の如じよさい才ない、刀鍛冶のように、金次第のいわゆる御差刀料おさしりょうなどは作れなくなつてしまつた。

貧乏は、彼を追いつめてくる。

お次は、何という宿縁しゆくえんか、妻ともなく、その貧苦たたかと闘たたかつて、

（大馬鹿者）

と叔父から云われ、勘当の身となつてしまった。

彼女は、それを、むしろ幸として、

『一生涯でも、清麿さんの仕事場へ、研水とみずを汲んであげれば、わ

たしはそれで本望です』

と、清人に洩はならした。

清人は、嘆息をもらして、

『もう、お故郷こくにの方に、義理立てもないのだろうか、師匠は、若
いお次さんに、胸やまいの病をうつしたくないからだぜ。女房にしない

からといって、それを恨んじや違うぜ』

『知らない』

部屋へ走りこんで、彼女はひとりで泣いているらしかった。

『きようは、お次さんの泣く番か』

清人が、そんな冗談を云っていると、窪田清音のすがね仲間ちゅうげんが使
に來た。——お次は又、はつと、顔色をかえた。

（もしや何か？ 自分の事で）

と、どきどき恟々していたが、そうではなかった。何か用事があるか
ら、清麿が帰って來たら、すぐ屋敷へ來るようという口上なの
であつた。

二

ずっと、不沙汰なのである。江戸へ来てからの恩を、忘れ果てたわけではない。

武器講^{しこう}百刀会の刀はまだ四半分も鍛^うち上げていない。どう自身でも心を責めても出来ないのである。しかも、前取りした金はとうの昔に費^{つか}ってしまっている。

闕^{しきい}の高い思いを越えて、清磨は、恩師の前に、面目ない顔を伏せた。

『どうした。ひどく痩せたじゃないか』

清音に、そう云われる程、彼は辛い気がした。

『——そう改まるな。今日呼んだのはほかじゃないが、武器講の一件だ。弱ったのう。彼方あつちこつち此方から、矢の催促はまずよいとして、余り長びくので、近頃は、そちに対して、種々な取沙汰だ』

『御恩を仇で返したような始末、何とも、お詫びのいたしようにが御座いません』

『わしの立場か。……ムム、それもわかっておるじやろう。——だが、もっと案じられるのは、そちの立場だ。近頃、そちはよく、勤王方の志士たちと、往来しておるそうだな』

清麿は、ぎくとした。恩師清音は、幕臣である。

『——で、近頃そちも、わざと足を遠くしておるなと察しては居ったが、武器講のお世話人、加藤宅馬殿を初め、多くは皆、幕府

方の人々じゃ。なお、始末が悪いわい』

『おことばでござりますが、清磨は刀鍛冶でございます。天子の民、日本の一鍛冶と生れたことを、果報と思っておりますが、何処までも、てまえの使命は刀を鍛つことと、分を存じておりますから、勤王方の志士たちと、往來はいたしておりますも、幕府を倒す運動などに、組しているわけではございません。それだけは……』

『待て——』清音は、抑えて、

『その善惡よしあしを、糺ただすのではない。唯、お前に告げておくのは、

わしの見るところ、この儘では、お前の身边が危いことだ。そちの本心は、どうであろうと、幕吏ばくりが眼をつけて、縛り上げようとす

れば、いくらでも罪惡の名目はつけるぞ』

『はい』

『ここ暫く、江戸から足を脱^ぬけ。ほとぼりが冷めたら又歸つて来い』

『でも、武器講の御迷惑をかけ放しでは……』

『偽りを申すな。今のそちの精神として、幕府方の侍共の腰^{もの}の刀が鍛^ぐてるはずはない。江戸に居たとて、出来るものか』

『……………』

『金の方も、後の始末も、清音が身に負つて致してつかわす。何処^{どこ}など、当分、遠国へ行つておれ』

『……はい。死後までも、御恩のほど、忘れませぬ』

『そう感じてくれたら、一刀でもよい。大君^{おおきみ}を護り奉るに足るような銘刀を鍛て。——この窪田清音は、徳川譜代^{ふだい}の臣じや。今にも、事こそあれば、喩^{たと}え勤王方の兵であろうと、この老骨に、伝来の一腰横たえて、戦うやも知れぬ』

六十も越えて、眉もすでに白い人の、その眸^{ひとみ}の奥に、清麿は初めて、真の徳川武士というものを見た心地がした。

清麿が、江戸から、忽然と姿を消してしまったのは、それから数日の後だった。

窪田清音は、来訪の客を見るたびに、

『不届^{ふとど}き至極な奴でござる。——見つけ次第に、お報らせ下さい。槍^{やり}鞘^{ざや}払って、一突きに、成敗してくれしまする』

と、非常な怒り方であつた。

客は皆、

『武器講の金を蓄え置き、逐電ちくてんしたものでござろう』

と、云つた。清音も一緒に、

『あやつ、平素から、金には汚い奴で』

と、罵つた。

今になつて——と、陰で清音を非難する者もあつたが、始末はしつかい悉皆、清音がつけたので、日が経つうちに、人々も、問題にしなくなつてしまつた。

世は、愈 騒がしい。

漸く、江戸の民衆にも、時勢の動乱が、眼にも、耳にも、解つて来たのである。

弘化、嘉水と、年号の短く変わるのまでが、あわただ慌しい感じを世に与えた。

どこに隠れていたのか、山浦清麿は六、七年ぶりで、ぶらりと、江戸へ戻つて来た。

（家があるかしら？）

と、すら思いながら、北伊賀町へ来てみると、清人は仕事場にいた。お次は、米の磨とぎみず水を流していた。

『よく鍛冶小屋を護っていてくれた。だが、二人とも、変つたなあ』

『お師匠様こそ』

三名は、お互いに、茫然として、何から話そうという事も、俄に思い出せなかった。

清麿は、今日まで、何処にいたとも語らなかった。——だが、彼の死後に現われた刀の切銘きりめいには、「長州萩城ニ於テ作ル」としたもののや「村田清風先生ノ為ニ鍛ツ」と切つた作刀がかなり見られるので、長州に潜せんぷく伏していた事は、想像に難くない。

江戸に歸つた後も、彼の生活は変らなかった。又、信念も変らなかつた。

象山はあれから後、一度帰国したが、次の出府には、清麿も又、江戸に戻っていたので、木挽町に行くことも、前と変わらない。

金子重輔と一緒に、吉田松陰しやういんと会ったのも、木挽町のその書齋であつた。松陰とは、その時が初めてではない。清麿が長州にいるあいだ、幾度か、その人の風には接していた。自分よりはずっと年下であつたが、清麿には、忘れ得ない人のひとりであつた。

その松陰は、江戸からすぐ又、長崎へ向つて立つと聞いたので、清麿は、自作の小柄こづか一本を餞別せんべつにと持つて、翌日、象山の家を訪うと、

『惜おしかったの、もう今朝立つた』

というので、彼は落胆して、帰りかけた。

すると、象山は、

『実は……』と、彼に松陰の旅行の大事を打明けて、

『わしも、松陰が立った後から、彼の大望を激励^{げきれい}する意味で、

一詩を書いたが、もう間にあわぬものと、ここに巻いて淋しく思うていた所だ。そちが心をこめた餞別もあるなら、今から急げば追いつけぬこともない。何とか、手渡したいものじゃが』

と、云う事なので、清麿は、

『承知しました。先生の詩を御覧になったら、猶更、感激なさるでしょう。お話をうかがえば、これが生死のお別れになるかも知れぬ門出^{かどで}、ぜひお渡しいたしましょう』

と、引受けて、東海道を追いかけてゆき、自分の気持と、象山の依頼とを果した。

彼を待つ大きな運命は、その日駈けた道にあつた。すぐ翌年——それは安政元年となつた三月——吉田松陰と金子重輔のふたりは、下田港からペルリの軍艦へ近づいて、暗夜に乗り、密航を企てたことが失敗して、幕府の手に捕えられた。

送別の詩が、禍^{わざわい}して、象山も国元松代で幽^{ゆうへい}閉の身となつた。当然、清磨にも、疑いがかかった。然し、小柄に彼の切銘はなかつた。唯、象山と彼との間に誰か、連絡をとつた者があるらしいという程度であつた。

その儘、夏になつても、沙汰はなかつた。秋になつても、呼出

しは来なかった。

——だが、彼が絶えず、何ものかに、備えている覚悟は、お次にも、清人にも、薄々わかった。

清人は、お次にそつと、囁いた。ささや

『師匠は、この頃、いつでも懐中ふところに、画家えかきの川辺さんから貰つて来た緑青ろくしょうのつつみを隠して持っているようだぜ……』

『えっ、緑青を……？』

彼女もまだ、そこまで切迫した清麿の気持とは思っていないなかったらしく、そう聞くと、真つ蒼になって、唇をふるわせた。

夜もすがら、木の葉雨がわらわらと、破れ廂やびさしを打つので、時折、眼がさめる。

しいんと壁が寒い。——十一月の中旬である。

寝床とこについてから間もなく、

とんとんとん——

表の門を叩く者がある。

清麿は、天井へ眼をひらいた。手はすぐ蒲団の下の刀へ行つた。

『——はい』

茶の間に寝ていたお次が答えてしまったのである。……しまつ

た！　と思つたがもう間にあわない。

急いで、帯をしめて、お次は出て行つた様子である。遂に来る日が来たのだ。ぜひがない。

覚悟は、日常にある。

万一捕^{つか}まつて、白洲^{しらす}に曳^ひかれ、拷問^{ごうもん}の苦痛と、幕吏から恥辱

を受けるのは堪え難い。——いや堪え難いのみでなく、生身^{なまみ}の体

だ、その苦痛に克^かちきれなくなつて、この口から、万一にも、勤

王方の不利なこと一点でも洩^きらしたら愧死^{きし}しても足りないことだ。

又、もう一つ彼の惧^{おそ}れたことは、大恩のある窪田清音の身に、

禍^{わざわい}のかかる事だつた。それを避けるには、自分の「死」以外に安

全な道はない。

清麿は、すぐ、台所へ走つた。

手桶の柄杓ひしゃくをつかみ、氷を割って、水を口に含んだ。

常に持つている小さい紙包みを、顔の上に逆さにして、緑青の粉を、一口に仰飲あおった。

そして又、急いで、水桶から水を掬すくい、ぐいと飲みほした。青い粉末がすこし溶けて、唇を燐りんのように光らした。

『いつでも来い！』

大刀を横たえると、彼は、死へ向って、こう叫んだ。

——その時、表へ出て行つたお次が、あれつと、悲鳴をあげて、ばたばたと、逃げ惑まどうような跫あしおと音を立てた。

『逃げることはないよつ。——もしつ、お次さん、お次さんてば』
彼女の開けた門から、途端とたんに、そう云つて駈けこんで来たのは、
お寿すず々であつた。

台所の露地から、走つて出た清麿は、うぬと喚わめいて、出会いが
しらに、刃を抜き浴びせた。

『——あツ、た、環たまきさん』

その絶叫は、半、死なかばへ心の行つていた清麿を、愕がく然ぜんとさせた。
お寿々とは、夢にも思つていなかったのである。——環さん、遠
い昔の名を呼ばれたのも、彼の胸をふかく衝ついた。

『……だめ、だめ。……わたしを殺しては。……わたしは、報ら

せに来てあげたのだ。今夜、わたしの奉公しているお茶屋へ飲みに来た岡つ引から、ちらと聞いたので』

『お寿々』

清磨はぺたつと、側へ坐った。

『お、お前とは、知らなかった。……お、お寿々……』

霜に俯つ伏した朱まみれた顔は、もう応えがないのだった。

よろよろと、立つと、彼方の闇に、凍ったように恟すくんでいたお

次は、

『お師匠様ッ……』

と、彼の胸へ、駈け寄るなり、縋すがりついて、わつと泣いた。

『き、き、来ました。……とうとう、おわかれの日が』

『^{とりて}捕手か！』

きつと、振向くと、垣根越しに、裏隣りの寺の寺内を、チラチラと駈ける提灯の光りが、透^すいてみえる。

近所の屋根の上にも。そして、物の気配^{けはい}にも。ぎゅつと、肌を緊めてくるような一瞬が、体じゅうをそそけさせた。

笠だの、合羽^{かっぱ}だの、草鞋^{わらじ}だの、鼻紙だの、一纏^{まと}めひつ抱えて、清人も、家の中から飛び出して来た。

今夜に限って、彼は、泣きもしないし、うろろうもしていなかった。

『師匠つ、はやく、この合羽を被^{かぶ}つて、草鞋を穿^はいて――。あ、あたしの田舎へ、逃げましょう。お次さんも連れて』

『清人か』

『そ、そうです』

『それはおめえの旅仕度にしてくれ。……ああ、長い間、苦勞ばかりさせて、済^すまなかつたなあ』

『そ、そんな事。……さ、お次さんも、泣いている場合じゃねえぞ。はやく、師匠にこれを』

『いや、お次には、平常^{ふだん}に話してある。決して、おれに義理立てなどするなよ。二人で逃げろ、きれいな仲の三人だ。生きてゆく先で、よく心と心で話してみるがいい、……お次には、おれから云つてある事がある』

みりつと、寺の藪^{やぶ}で、生木^{なまき}の踏み折れるような響きがした。清

麿は、二人を門の外へ突き出して、内から棒をかつてしまった。

六

大地が号泣するように、門の外に、それからも、暫く嗚咽おえつの聲がしていた。

清麿は、よろばいながら、雪隠せっちんの横の縁側から這いあがった。御先祖と、神棚のある部屋まで、這って行こうとするらしい。だが、緑ろくしょう青の毒素は、もう血の中を駆けまわっていた。がばつと、縁に、首を垂れてしまった。

——一瞬。

清麿は、あらゆる苦痛が、体じゅうから解ほぐれるような心地した。然し、意識はその体を、もう動かそうともしない。

板の間へくツつけている彼の顔は、にやりと微笑したようだった。耳には遠く千曲川の水音でも聞えているらしい。きれいな小こ禽とりの音すらありありとそこらにする。

(……いいよ、いいよ。何も、謝まることはない。そなたは、わしの子ではないか)

ぼつと、虹の環わのような中に、母の顔が見えた。昔ながらの温いお管すげの顔である。

(不孝？ ……いいえ、おまえが独りで苦んでいるんだよ。わたしは、おまえに乳をあげた土ですよ。咲いた花が悪かったら、わ

たしという土が悪かったことになる。だのに、そなたは、天子様の赤子^{せきし}として、恥^{はじ}ない華^{はな}を持ったじゃないか

兄が側で、頷^{うなづ}いている。嬉々として、梅作が小さい掌^てをひらいている、——淋^{しみ}しげではあるが、お咲の顔も、自分をゆるすかのような眸^めで、凝^{じつ}と見ている。

萬象、あらゆる物が、その霧の中では生きている。見たこともない白髪^{びやく}の老人^{ひろう}などが、飄^{ひょう}として、横^{よこ}ぎつてゆく。——御先祖様かも知れない。と清麿の、意識ともつかない不思議な意識がふと思う。

恩人の柘植^{つげ}嘉兵衛^{かへえ}と、窪田^{くさ}清音^{かね}とが、破顔^{はがん}している。それでいいのだと云っているように。

——直胤、直胤、直胤。

と、彼の霧の意識はさがしたが、どこにも見えない。虫けらのように見えない。

ばりばりッ！

これは、現実の物音である。

垣を破つて、捕手は、雪崩れ^{なだ}こんで来た。

『あつ、戸が開いている！ 風を喰らつて、逃げたぞ』

清磨の俯ッ伏しているすぐ側で、こう^{どな}唳鳴りながら、捕手たちは、彼を見出さずに、家の周りを、暴風雨のように駆け^{めぐ}繞り初めた。

その声に、ふたたび此の世の肉体へ、飛んで返つて来た意識を

持つて、はツと、首を擡もたげた山浦清麿は、両手を、懸命に縁の板へついて、わずかに、戸の開いている方へ、身をにじり廻した。
——そこから、彼方遙かなたはるか、京都の方を望んで。御所の常盤木ときわぎを胸に思つて。

『……………』

十一月の夜、霜より冴えた夜、星は一つ一つ、燦さんとしていた。
恭うやうやしく頭を下げるなり、同時に、山浦清麿の鍛った刀は、山浦清麿のんどの喉を突き刺して、かりの世の肉体を、ふたたび永遠ようこの溶ようこ鋤うろへへと送り戻した。

〔作者附記〕 山浦清麿の遺作は今日猶、不朽な銘刀として遺された物少くありませんが、彼の事歴は、死後湮滅いんめつされた為、殆ど記録も稀れで、作者の推理と、想像に拠った所寡少としません。又、脚色上仮想人物の点出も云う迄もなく、主人公が近世の人物であり、現存縁故者もあるべく思われるので、敢て、お断りいたしておく次第です。猶、熱心なる山浦清麿研究家藤代義雄氏、岩崎航介氏などの作者に寄せられた御好意をも、併せて多謝いたしておきます。

（昭和十三年九月）

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「講談倶楽部 臨時増刊」大日本雄弁会講談社

1938（昭和13）年9月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山浦清麿

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>